湖月抄

をとめ

葵

巻の名歌によりて号す はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしのけふをまちける 源内侍 かざしける心ぞあだにおもほゆる八十氏人(ヤソウヂ)になべてあふひを 源氏 源氏廿一歳より廿二歳の四月にいたるの事あり 花の宴の巻は十九歳の三月とあり此巻のはじめ廿九歳の四月より廿歳の年中の事みえず 此間に朱雀院の受禅 冷泉院の立坊 弘徽殿の大后 斎宮斎院の卜定 源氏大将なとの事あるべし 花宴巻に委し

世中かはりて 河 桐壺の帝位をさりてゐ給ふ也 孟同 花宴より桐壺の御位を朱雀へゆづり給ふまでの事なく此巻花宴の巻より廿一年のまでかゝるしるべし の間に巻はそうじてかゝれたる也 なりけりの御かずひろくと あれど事なく年花の宴の夜状のくるいまだきえぬ 細 朱雀院の御位ゆづらせ給ふ 代始あれば源の父帝の御代ふるくなりたる故かくいへり 御心にかなはぬやうなりとなり たゞ赤 桐壺御在位の時のやうに源の心のまゝにもあらぬゆゑかくいふ所 源氏の心をおもひはかりていふなり 御身の尊くなりて 細 源氏は近衛大将になり給ふ 頭の大将になり給ふ也 はなき事也 紅葉賀より大将とみえたり 師通兼保四年三月廿七日任 寛弘識同四月三日兼左大将云々

世中かはりて後よろづ物うくおぼされ御身のやむごとなさもそひぬるにやかろがろしき御忍びありきもつゝましうてこゝもかしこもおぼつかなさのなげきをかさね給ふむくいにや猶我につれなき人の御心をつきせずのみおぼしなげく。今はましてひまなくたゞ人のやうにてそひおはしますを今后は心やましうおぼすにやうちにのみさぶらひ給へば立ならぶ人なう心やすげなり。おりふしにしたがひては御あそびをこのましう世のひゞくばかりせさせ給ひつゝ今の御ありさましもめでたし。たゞ春宮をぞいと恋しうおもひきこえ給ふ。御うしろみのなきを

猶われにつれなき人の御心をつきせずのみおぼしなげく 抄 いとせめてふかきおもひに我ゆゑ人のうれへもうけぬ 抄 此をとくと源へ葵上のつみ
よく物おもはれは源へうらみのある人々おほくおもひつもりて源へ又は葵上の
世をすてるといふこともあれの事也
今はまして 細 御脱屣ありて後はひまなく御なりて葵上の
よ御ひまもおほきなれば 弄 同 御位をおりさせ給ふ御ひまなるゆゑに今ハましてといふ也
ただ人のやうにてそひおはしますを
いま后ハ 細 弘徽殿也 后よりまろくそひおはしますを心やましうおぼすにや 花 朱雀院即位の時に弘徽殿女御を皇太后と申き
御子の女宮ハ心やすくなり給ふ 抄 弘徽殿后ハ禁中にのみさぶらひ給ふ也
藤壺女御の中宮になり給ひて弘徽殿后の位にさしつかへ給ふ也
よろづたちならぶ人なうて 細 藤壺ハ立ならぶ人もなくて心やすげ也
かかる人もなきにたちそひておはします事
今の御ありさまめでたし
うち春宮をぞ 細 春宮とは 花 冷泉院坊の御事 花 冷泉院をさして
始てみそかなる立坊は受禅の御事なれば
大将の君 細 此時春宮の御後見なき故に大将に御たのみある也
大将ハ朱雀院の御子なきにより春宮の御後見を源氏にたのみ給ふ也
中納言藤綱まで大将になりて世の御後見ある也
大将ハ世の御後見なれば也
いまだ大将にておはしける時 花 后紋 一条摂政伊尹の例也 花 宗関白殿道兼公の子左大将のほど也

うしろめたう思ひきこえて大将の君によろづきこえつけ給ふも
かたはらいたきものからうれしとおぼす
まことやかの六条の御息所の
御はらの前坊の姫宮斎宮にゐ給ひにしかば
大将の御心ばへもいとたのもしげなきを

始てみそかなる若葉巻に式部卿一品宮のもとにて大将藤原のとあり
まかで給ひしうちに右大将左大将あはせて源氏の御事也 花 弘徽殿の弟也 細 前坊ハ
春宮のきさきもうけたまはりて御子もなくてかかりつる中に此御息所の女を 細 前坊ハ
世をすてたりといふ事也
まことやかの六条の 細 物語の作者のことばなり
前坊 花 前坊は辞退ありし人也 前坊と申すは一条天皇の
御坊の御子早世ありし前坊のことあり
ひめ宮 細 秋好中宮なり 前坊の御息所の御腹也
斎宮にゐ給ひしかば 細 秋好中宮のちに斎宮となる也 前坊の姫宮をば
卜定ありて三年めに下り給ふ也 弄 斎宮の事 恵仁天皇の皇女倭姫の命より始まる 天皇即位の始め卜定ありて伊勢太神宮に斎宮の御をさなくおはします
此物語ハ延喜の式に准じて延喜式第五 斎宮九ヶ天皇即位者定伊勢大神宮
斎内親王未嫁者卜定若無内親王者依世次簡諸王女卜定之
河海抄の説也 二表
大将の御心ばへ 細 源の君の御息所の御ことなり 抄 御息所の心ばへさへあかなく
ここもかしこもおぼつかなさのなげきのみぞおほかるべきなれば御息所もおぼしなげき
さりとてふりすてたまへるもやさしきあはれさ
心をとどめ給へることなれば此歌にも
見てもなほ心にしみてあはれまさる
といへる也
細 源の心のうちなれば
さりとてさすがにおぼしすてがたき
伊勢へ下りやしなましとかねてよりおぼしけり
院にも 細 桐壺の院也
かかることなむときこしめして
院にもかく聞しめして 桐壺帝の御事也
ことに院は前坊の御息所へ源氏の
のうちを定め給ふ事
をさなき御ありさまのうしろめたさにことつけて
くだりやしなましとかねてよりおぼしけり
院にもかかることなむときこしめして
故宮のいとやむごとなくおぼし
抄 御息所をさして
いとときめかし給ひしものを

いづかたにつけても　御息所ニ
つきても斎宮につきても御息
所のかたをおろかならずもてなせと也
すきわざ　わざくしき
好色のことなり
御心ちにも　げにと思ひしられハ
源の御振舞よろしからね
ば也
ノのたまはする　院の仰なり
細御門の源に人の御教訓
葵上ニ御息所の御事ニ
物語して事によせて　孟日
そしらぬ心のおほけなさを　細藤
花散里にも密通ありし事をほのめかしけるとも
きこゆれども
又かく院にも　御門の教訓ニ
より源のいよ〳〵さまあしく
河内　息所の御事とし

ろ〃しうおしなべたるさまにもてなすなるが
いとおしき事。斎宮をも此御子たちの
つらになん思へハ。いづかたにつけてもおろかな
らざらんこそよからめ。心のすさびにまかせて。
かくすきわざするはいと世のもどきおひぬべ
きことなりなど御気色あしけれハ。我御心ち
にもげにと思ひしらるれハかしこまりて
さふらひ給ふ。人のためはぢがましきことなく。
いづれをもなだらかにもてなして。女のうら
みなおひそとの給ハするにも。けしからぬ心の
おほけなさをきこしめしつけたらん時とおそろし
けれハかしこまりてまかで給ぬ。又かく院

いとほしくおぼす
御門の仰によりてはなを〳〵
むつましくは思ひながら
まだあらはれて　細　源は
わざともてなしきこえ給はず
よしなり
御年のほど　細　御息所は
源より八の兄也。此時御息所
三十九か二十一源は廿一也此須
の年御息所ハ三十ニていま
関白に婚しあれば也
年のほどを　河内　御息所の
はづかしうおぼして　孟日
いよ〳〵つゝみ給ふ
細　源の御心を御息所の心
しりて。御息所は心とくる事
なき也
しく世の人もしらぬなく
なりにたるを　細　孟日
ほのかなる御返りなども　源
朝顔の姫君に源のすき給ふ
御息所の上を聞給ひ、世の
人皆うたて思ひて

聞しめしのたまはするに人の御名もわがためも
すきがましういとおしきに。いとゞやむごとなく
心ぐるしき筋には思ひきこえ給へど。まだ
あらはれてハわざともてなし聞え給ハず。女も
にげなき御年の程をはづかしう思して。
心とけ給はぬ気色なれハそれにつゝみ
たるさまにもてなして。院にきこしめし入
世中の人もしらぬなくなりにたるを深う
しもあらぬ御心の程をいみじう思しなげ
きけり。かゝる事をきゝ給ふにもあさがほ
の姫君ハいかで人にゝじとふかう思せハ
はかなきさまなりし御返りなどもをさ〳〵

わかうどの姉君　細　桃園乃
式部卿の女也つねに源によばれて
まさかりとて姉君なかりし人
これ息所のまくらそへなと宮を
おくも槿の君八第一の君の人
のようし　うへのきさいの院
一分の内代貞女八槿姫君と空
蝶とく
こもりて人かくて　花　源氏が
びきかるねせきうかと文り
きなくはわかねかりてかせ
人よ八朝かほ源の君の道
あまりゑりね　細　葵上の方
よハかのみとを源の心く
て見侍いけるよしの(を)え
しはすなく
落しをすると八きれと
細　御息所へのこころえある斎
かり面白き心ねかり
河　御息所八好きかり

あし。さかとて人かくて。ちゝられくハまもしろし給
まさに鏡文を。君をし花ゝしかりと姿かりもとさ
家大殿中はかくの(さ)きさかめさされ。なさ(を)ごくろ
づきなりしくかをどめまつてもあれ九給し
のつかひがけまゝ八あやかしんかうちつもこまん
じるうて給ふほかくさしきゝ御のけかち
よかやとなて桐ちつろほそげるゆかりてさら。
めづらう(哀)しとてひきうてしあそひれし給
りくられかくゆくちりかりくさ御ぐの
はつましくきせまてもう給りやうなま
見どはしられ　なのゝ御かくてゆかりしど
うちうらはなそれど。まてしゆ(御)かるべし。その

歌読　河　嵯峨ノ皇弘仁元
年置斎院司以皇女有智
内親王母交野為斎王
延喜神事式六凡天皇即
位定賀茂大神斎王仍簡
内親王未嫁者卜定云々
花　令業歌読御後来先ト
定ありて东河にのゝを給て
みそきされるよりみそとくに初
斎院へ入る太紫野院と八太内
の大膳職或左近府なと
を避りてそれより三年　潔
斎のうちと
さらいちう
御服花宴まれ叢ぎのるり
おかしへうろくし柳よ渡の
御服まそてかりのゝ
もちこどよ如かふと　細　歌読
よ立給ふり初まりかとまつき
てんつきなしとて　孟　潔斎
まて人けと離さふきれに別
よ立給へ人すさこれよ立給く
まりのなとて　孟　さてこまれ
るうすの上花ろうとそへおふ

のこり歌読をおりねあて(ご)さいゐらの女三
えねまれどとしききれのしてもまよきへむこと
えまてる文ゐれハもさらよしよなりらまふ(葵)。
いとうしう給ひられどもてとことやうらのさう
へき物をかんぜずまれとつねのくんわざかれ
どいかしうのてもつ。まつりの粧がなれる。
給ほやげとよそふと物ほくえ所ところ(医)。
人かくとそくまれどさいの日かんざらめなる
どうそきさまりて(川)かうまつり給ほさされ
ど。物(ゝ)こよなうらかりがへまうさうされ
の名をうへのもとの御のりん。高くてこまぐくされど
とのへうらうわざし。古宣旨にそて[illegible]

人々うらとし　細 人々うらとえくらうとハ何うすき人々うく之室人まうり事と之

ごけいの日　細 斎院と卜定して二度の禊あり其二度めの禊と見えてこうり花宴まある花宴の
四月ま御はへまうり給ひんとて祭の前ま吉日をえらひて又御禊のうあり則紫野の野の宮
うりへうふられき二度の禊ハ云さて中の間の日ま紫野の社へまうりまうて給ふ又ニ宮
ひなふこ毎年の禊ハ其年の日先と御定アリ今女三宮ハ桐壺の御門御譲国の後卜定
まそ初斎院へいりまし初度のえらへの事ハ此物語まみへきを今此巻まいらうハ野宮へ入る
むとその二度めのえらへと云り又数ハ勅使参議一人供奉を二度禊ら
大納言中納言宰相おほく供奉ハ毎年の禊まハ一向ま供奉をは延喜式ま二度の禊の勅使ま
ハ大納言中納言各一人参議二人四位五位各四人凡て十二人の勅使也これを数さまると云
源氏大将ハ参議二人の中なるへし是をはてえんとえまはきしまよりハ二度のえらへなり

きりのく
おほしこまかへらあり

細 人とちかたちあるかきり 細 容貌ある限といふハ見まかりと勅使まいゑらせ
下かさねのいろ　細 下かさねのいろうへのはかまの紋下襲表の襦と云事ハ海をく用ゆへく花御
禊の日ハ勅使公卿ハ深緋袍を束帯をきるハ唐鞍或ハ和鞍を用事葉と云ゝ
ところゝにせんしまそて　細 大将供奉例花宴ハ見ゑうり花国史云貞観三年四月十二日丙辰賀茂
之斎内親王臨鴨水修禊是月使入紫野斎院勅大納言正三位兼行右近衛大将源朝臣
定省監禊事云ゝ斎院御禊大将供奉例也
物見車心つかひしけり　抄 此禊を別してとりわくるハ源氏の君大将の供奉ゆへ
なりへし　もつかうまつり給ふかねてより物見車心つかひ
一条の大路　抄 河原
ハおほかふ道なりお此大路　しけり一条のおほち所なくむくつけき
大内裏の外の大路なりよ
つゝく一段広きよひろき二丈　てさわぎたり所〳〵の御さじき心〳〵にし

くさ(?)のれおりさも　抄 葵
此上ハ此心おもしろくしてうや
うの袖口まで　まおほま
まして懐妊ゆへ思しもうけ
さりしせ
そらやとのどち　今日の物
又どもてめづらくまれ
まうい出てえんハさひまう
んとく
みかさつる人まま
かのうけもあれまうを
いつそり
かはりまめくらし
　　呼車のまら所なき時こに
うまへりお供奉の人なと
を遠めくらしさらしなり

つくしたるしつらひ人の袖口さへいみじき見物なり　抄 袖口 御簾の下より出したる袖
又抱見なるをもく
さうしのなり大殿にはかやうの御あり　細 葵上の
きもをさをさしたまはぬに御心地さへなやましけれ　懐妊ゆへ也
ばおもほしかけざりけるをわかき人々いでや
おのがどちひきしのびて見侍らむこそはえ
なかるべけれおほよそ人だに今日の物見には　源氏
大将殿をこそはあやしき山がつさへ見たてま
つらむとすなれ遠き国々よりめこをひきぐし　妻子
つゝもまうでくなるを御らんぜぬはいとあまり
もはべるかなといふを大宮きこしめして　細 葵上の母宮也
御心地もよろしきひまなり　孟 安曲を引まと云　師　さぶらふ
人々もさうざうしげなめりとてにはかにめぐ
らしおほせ給ひて見たまふ

よそほしうひきつゞきてたちわづらふよ
き女房車おほくてざう/\の人なき
ひまをおもひさだめてみなさしのけさする中に
あじろのすこしなれたるがしたすだれの
さまなどよしばめるにいたうひき入て
ほのかなる袖ぐちもののすそかざみなど
物の色いときよらにてことさらにやつれ
たるけはひしるく見ゆる車ふたつあり
これはさらにさやうにさしのけなどすべき
御車にもあらずと口ごはくて手ふれさせず

抄 車之　孟 雑々 細 雑人　河 息所の車之網代車　細 此息所方の人のいふ

いづかたにもわかきものどもゑひすぎたち
さはぎたるほどのことはえしたゝめあへず
おとな/\しき御前の人々はかくななど
いへどえとゞめあへず斎宮の御はゝ御息所
物おぼしみだるゝなぐさめにもやとしのびて
出給へるなりけりつれなしつくれどおの
づから見しりぬさばかりにてはさないはせそ
大将殿をぞがうけには思ひきこゆらん
などいふをその御方の人もまじれゝバ
いとほしとみながらよういせんもわ
づらはしけれバしらずがほをつくる

ちれ只今となりてハ志らね
ぬをとゝくつる紙なども説乃
さ侍ありくてし如く
人さまひ　河 人給 儀同口訣
榻記有此名或車ニ云ゝ人給
八家袋ニ載也　花 或車と云方
より罷出てをく人々を乗る
必ハ人給とまつくある枕
まう云ゝものとなくさくらニも
さる所の御車 人ずまひ引
てきそ此かくふつといはく
ゆゑむとあらんみの給よ
御前とさしてせちにおりて
さきり車ともみなのきまよ
のけさせてとい
心やましきをといふのそ
抄 車たとしやりのけられて物
をミへぬさ侍くそれなりも
わざとやつし思ひまうをそ
御息所とさとりていふく
さしの事さる所をねさう口
わりく思ひあふとくられ物の
前よ出入ハさうしめく
河 青ハ女房車

車どもたてつゞけつれば、ひとだまひのおくにおしや

細 出車也　孟 雑車云し

られてものもみえず、心やましきをば

細 御息所也　抄 御息所の御車のさま也

さるものにて、かゝるやつれをそれとしられぬるが、

いみじうねたきことかぎりなし。榻なども

細 牛ハかけずしてなき也

みなおしおられて、すゞろなる車のどうに

抄 牛なきハ榻と用ニなきと也　いふかひなくぬやくの御也

うちかけたれば、又なう人わろく、くやしう

御息所の心

なにゝきつらんとおもふにかひなし。ものも

中なり

みでかへらんとし給へど、とをりいで

抄 見物をなどしてく

んひまもなきに、ことなりぬといへば、さすが

細 や 欲祓の行

にのつらき人の御まへわたりのまたるゝ

啓たりとく

も心よはしや。さゝのくまにだにあら

孟 御息所の心よ源をさえんとなり

ねばにや、つれなくすぎ給ふにつけても

花 まさ

源を待ちこまくとまふを御息所ハつれなしとおもふ心也

中〳〵御心づくしなり。げに、つねよりもこのみ

御息所の心

かねバことろく其つけても中

もくみかり車のどうう　車のどうとハ轂と云轂ハ車の輪といへしすくく一説車の床と胴とのふくし
かさし 榻どもてりくみの御所の時　勘 出車ハ榻ハ用小のかりむすりいとハ
抄 見車ハ牛をはなちて榻よ轅とおきて車をおさへるれ八外のく
さまれ轂よれ息所の車ハ轅をかくまてとうしく
きくの年わがに　細 引きうけどもふらんをとろし　河 しゝの年ひの年川よ綱をかく名のくろ
いれる所ろん　花 うもどうよ云ひしみんと云まことの年ひとつねにかゝねハつまるかくことある也
なりハ下の御息所の前よりけとのこみつし付のつまかりさうとあり　時 其弟を引てそう供
まもと下の方とハ見やで給ふしきもり花をいれいかしもとぞ御所の方よもわるかに花
み侍く源氏のかたゝものすく見やり給ひてまてり
心やく御こころほくしかれ　源氏の御前よりとりてえりてふてしかまとえ
前よつになりも　前よりゑてより抱え車ふつひしまりとかるやうまてくにとて
物かこつきりめる　細 源のそれよりてゆきぞめ物ふとあるく　孟 源の思人の車を
御供の人々ひらくしこまり
細 源の供奉の人此葵上乃
御すんをえ花をいつしをつ
さ侍えいふゝ御息所ハ口構
く見給く
とう前されたるありさま
孟 葵上の車の前を晋顕
勢よまさるとうらく御息
所いつく其金子出給ふて

とゝのへたる車どもの、われも〳〵とのりこぼ

女房の出衣のさま

れたる下すだれのすきまどもゝ、さらぬが

源のゆくやうよもて

ほなれど、ほゝゑみつゝしりめにとゞめ給ふもあり。

てかく御くくて　細 葵上也 孟 葵の車也

大殿のはしるければ、まめだちてわたり

源の供

給ふ。御ともの人々うちかしこまり、心ばへあり

御息所の人之葵の方をきれさらく

つゝわたるを、おしけたれたるありさま、こよなう

みげなのこゑ　細　御息所の御事
世今日の参の御人時...
所の源氏を八方の御人...
源氏ハうすも打きこて...とよめ
つ毛秋名院殿御説云...
久の...たらんの前と心よ
りちこ前のさてれ心更また
よおしねえと云候のまゝ之
めもあやなり　花めものゝを
くろかーきりの文を見つやく
けり　後撰集後拾遺
紅葉ちゝ錦とみるとこそしり
とめもおくにはてそれさ...
はめもあやハあやなきさ...
紫のちらこらにそかを心ゥ
ぞろえし
右将のかの行幸よ　河　かの
行幸ハかり　其日つかうすと
出くく第此年月西那義
之徒撰ゝかも多しつれまお
かの行幸とい之ハ一員とも
多侍くゝ之　公卿の相監ね
曹府生と一人つかけその

なう如がさう

（御息所）くげなのこゑくつし川のつま遊びよ身なさう
き禄ぞいらしとく殿のこぼるゝを人乃
くうちのいとらしいぞ　てらへとみんぞりしまし
くべとはばさかぞくなつけてさうぞく　ん
のおんき海いちもうとしのへさんしこゆ
なりおもし逢てかくうをとするえひてこ
ろの御ひろかはとて當されあん大將乃
うりのずいぞんよ。殿上のそうけどの、もとうこと
ハつねのことふとおくほめて行幸ねと
のおりはきさけうにふハ右近の死

のふく識よしつて隨身と號ハかきりありて出仕のよびよのつめよしらるゝ人ぞかはりに隨て
一人ていし...とかりの隨身とらふく假令納言の大將ハ下ハ右ハ左ハ大の番長一人を...
...六人の隨身とゆるされてゝ...
奥まかと一員ともりの隨身ともいふくいつまもみる陛下のそうしと...
上の殿人ハの御監とい之それと一員よ奥まかうとハ御殿
監ね曹在幸陣よ伏女をろよしつてゝの一員よつしふうべしたよ...
故一時の個人...
源氏ろ将とかの人...
監と兼家の公也　細　兼意も源氏第一の顧...
況や殿上の殿人とて...
左近衛人のそう　細　抄
の萩の花才之　師　伊与などの
なせ役よ次广ハ源のさ...
へ余附て作りをして
まつめこそいちハ　抄　右の
せうの和の行程もとも
やし帯出充ろく是等也
下なり
木草とかハのおハ　河　論語
日君子之徳ハ風小人之徳ハ
草尚之風必偃　師云　尚ハ
作ル上ニ加也
つゐさくろく　孟　後成て女院ニ
云市女笠とうきぬ事

つくりまつりきうしぬれどもいぞんとものぐくら
もかうまぐいれくそくのへて世をのがれ
すへき海木草をなびかぬはあらましけり。
つれさそくにほひもなくこのまゝ女がらのい
やうしぬや。又かきなどの世をそむきはげ
なりもうらわれまびけ。婦人よおかしまれい
んびあからなりや。おそふくとみてみ...

さる女をつかさどるくといふとぞ 河白 大孟津よつかわ装束ハ衣つかわなる〳〵と入れ太府證之
ちく 師 衣つかわたるといふ事ありて小袖の中への衣のつまとわてこんよみさし之 河 源お装
松葉絵ふころしたりのつかさくそくきうろ人のひそこそらり
女ひとのはやしらくめや又わまゐるの 前よあかし記やまら何さんこなりん ともされハ生き
国より妻子を引さそうしてといろ着尾く
例ハあなからよ 細 老女なりの気味よ引くろハよのつまハふくきゆかんと今日ハことなりとみへり
師 源をとらえと思そ出られハおしとなりとく
わとさこあいろ
細 是ぶつわ装束のなりく
孟 つわたりすへみとこあ
入ろハなり
てを渡りて 細 花寄事なり
来朝よ司馬相如と云し者
の洛中に入し時ハ是をとろ
りのまを額よ加ふとさる
通鑑ともえ出よみえたり
云こ是思おやまりてなる
し給なるへし是ハ司る相
ムなりつへし同る温公なる
せ相如ハ漢の代乃ハ温公の
まを知のよふよ強ろおもし
通鑑も宋朝通鑑ハ
司馬光 封 涑 備士 以争ヲ加テ

こととりよくらくらをかけかへてかみこ あさ
孟 口とひろくみ老人の歯はぬけたる様之
ふあやしの抱へもれ 手をつくりてひさしいよわ
孟 手をあわせて拝む様く
て川くらそまくりわきくさしを地とりまうしけ
なり老のかなぞとのかわのあしくむさ庵とハ
抄 身拾を忘して源をうやまふ之
ましてさらえしらひたふともこいれ給ぬ
抄 源のらくそもくろまし紀かたへ
さ色をぬりやうのひともめなりとさん公のあたり
良類の中にも不ふくろくなく
殺人す語らとの思之
はくしろ車ともよのりさ庵ことさらしび
しりぞきうしたりけんおりしそこへりくの之おり
孟 さ庵くの之

何よ大鏡よ云一条院去日行幸に御輿ハよ大臣そひのしさるふよ田舎の民百姓まゐく 紗
佛のやうりり額よ手を合さくゆらくさまりろりらく
ましてうりして 源のこい
進みふまうき人さ人公お
さくらさとましてこ源のくり
みくし思ふよひのふかきのわ
よりハくやうよ及なきさ源
のさ庵とさそわりたのねる
らねを思ひおらわきさらく
ロふ人多かりしとく
細 源と
神なりしハめしてそ
いうこりての縁つく紅紫衣に
以徽敵の詞ハそねこ悪くとあ
ハ其こうりの給ふお録と見り
ここらきこしわさり給
時 檀の姫君の御事く源氏
の御年比熟よ嘆て給ふ姫
君のれならとまりなりける
源氏のめてさきハからしも
いかそとぞまてえてく給と思る
てうのめあくらん人なんとても
くねん比なりよいかひとさ
もをつきさ事なりともめし
て源氏よなとりふあしとされ

なりきりおりてあくりしこよきらしのびてか
よひ給ふくハ人まれとくまをすしぬなけさこますさ
細 桃園之花の類姫君の文之
ふるを地かりくをり武アつるからしさかなくそこ給
源のさ庵を桃園のの奴く源の叔父之
きりいとはゆきまでわひゆく人のくちか
みえ
お神なとハめをこそよかさまへとゆくえて御
しら姫君ハ年でかさらくよろく給はんぞ
細 檀の姫君之
源の檀の姫君よまく
への世人にまねをかなのあすらんかくされあり。
ましてうりまとひりくとけんとまりきりいとし
名あるハ何とそ家こしき源そとの心し
ちりてさん人まてハ地がりよくほわりきこへ
孟 檀の年智前のゝ
源と参らく
ハさらふくさまてめぎのあからぶうりの日
孟 寄見之 細 前見
細 蓬上之
細 源よ参人のちょうさく
ハ大殿中は抱え給るはえ大ねの君りの御車の前

とけゝくとハ心わくぬる
權の典女なりけらし 細盍
たわむく心ちつくよ心のそら
細 葵上ゝこのゝ事ならり
きうりてやうまいやまし
さまく物れとも御息所の
わさりへおむつくしてはそれの
しれまさるとゝそてまいくく
と思ひてかやうのことも御心
やかとくへ 晴 左大臣殿の家
風をのさまゝり
こ川りうハさしも 葵ハらや
うまけ息所をいれくら宮
まかせんと八心のふましれれも
日比やうの中ましハけきやゝの
ハとそめのとまゝありぬねなを
その比わまうすゝひて次くの
所まうしぬ人てのきしま
まいらんとゝく
斎宮のまいりしの家ま
細 卜定ありて左馬の院
うさま入給へきをさりつゝす
あらて来年の六条京極
ことかしき（?）し 晦日

あくそひとまゝのひめ人ゝまされハらうたく 源なく
おしうしと心得しくわかうしおかりけるよ
いとこゝる人の（葵のうへ）みよなきけとられくそぐく
志さ雨つきまゝるすまゝのかるうくいさしまち
心はゝめれとくなやみしひんなるけゝハ
よく思ひもゝ心はいくつぬとたのむとゝて
しそひてつるくよゝぬ心とのさとせゝ
するをしけれは御息所ハなやませのとゝつりしくは 河 愠 荘子経
しわりて心はさかりのせいなる心はしうむ
しよもんとゝと心しうてまつりそれ 源 これ息所へ心なく
歌家のわさかりとの家よきゝしませハさうとき
はくまりよしつけてんせとくもさいわれ 源くし

花 延喜式云 定伊勢太神宮之斎内親王未嫁者訖即遣勅使於彼家告示事由神祇祐以上一人率僚下随勅使共向卜部解除神部以木綿着賢木立殿四面及内外門 今案秋好中宮ハ去年卜定ありて未給日へ入給ハぬなれは非初斎
さまにとえし榊のことくりと八是をいふへし
榊のことくりに 細 榊をもて對面ありしと 河 榊ハ日本紀ニ真賢木とも真坂樹とも書り 天の香久山の真賢木を根こしにこして榊の字ハ日本の作り字也 龍眼木とも書也
ことくりとは
源 のことハ御息所の心を案じて
しそてなり
なにやかくさてとり
細 只今對面の事をいへり
源の心く 師 葵もハ息所
とかなり
さこハかさにさとし 源 詞なり
葵の上と同車して祭ニ
あれとの心ふさく

しぬつとゝとそりとも心はしつかすかて
やうくさとまそはくしりしそておはしそうし
とくらつやくれあふたゝて二条院よう 細 源と
出かゝしてまつりさよいそ給ひしのさいはれ 盍 葵の御方へ
ありあそて權光よ車のゝし心ほとへり女房ハ 葵の方ハ童
でよりやとの給て姫君のいとうけしけよれ 源のさハむれのうちく 盍 葵上之
くさひそく心はとう給ふらちゝて ゝるてま 源の心
つり給さらはいさしまへりろとりよらんハと
てけくしのつひょうもとちてりつまゝあろとなの

ひさしう　そぎ給はざめる
とく鬢そぎわづらひことの
びくはなれしとなり
こよみのはかせ　暦博士
細 推古天皇十二年甲子正月
戊午朔始用暦ヲ
まづ女房いでねとて　師 前は
も女房いでゝ河やとの御ひ
えいでねとのたまふ也童のすが
たどものをかしげなる　おもられそ
紫の方の女房たちとめしお
してをかしきとは源をさ
せし　細 今日は源も女車
にて御出なるべきにや
うきもんのうへのはかま
女のわらはの河にて着る也
花鳥よみくせり　河上説絹綾
のもん也うきもんのもん也
紫の上をおもふこと
細 西宮記女親王對面時ニ總
角着着汗衫半臂下襲
表袴玉帯等又齊宮齊
院童女着總角青色麹塵
柳帯　今案童女晴時ハ
袴ハ上表袴とさうさきもん
第二數に世の常は表袴
不着なり
ちひろ　細 延喜河海の
説　ちひろはふかきことのいはひ
の具也海松と用ゐたる也
花鳥に十二髪のそぎ
ぎすそをつくりつけたる
やくなし　孟 髪そぎの調
度の中に海松と山を作る
こともあり　碁盤　山橘　海
松　青目の石二つ之也　花鳥
と御髪はそぎたまひて
ちひろとも　花 源の君の尋
と祝ひ給ふを付て定なきは
人をみるに塩にさしてよ
の海もさだめなきにとぞ
細 みちひるしほのさ
だめなきをとりて也やう
くやうなるひろうらくえゝ 孟同
むまばのおとゞ　細 一条大路なり　河
右近馬場は一条西洞院大宮馬場
八一条大宮也　花 也ハ北也

なでたまひて、ひさしうそぎ給はざめるを、けふは
よき日ならんかしとて、こよみのはかせめして、
時とはせなどし給ふほどに、まづ女房いでね
とて、わらはべのすがたどものをかしげなるを御
らんず。いとらうたげなるかみどものすそ、はなやか
にそぎわたして、うきもんのうへのはかまに
かゝれるほど、けざやかに見ゆ。君の御
ぐしは我そがんとて、うたて、所せうもある
かな、いかにおひやらんとすらんと、そぎわづらひ
給ふ。いとながき人も、ひたひがみはすこしみじ
かうぞあめるを、むげにをくれたるすぢの
なきや、あまり情なからんとて、そぎはてゝ
ちひろといはひきこえ給ふを、少納言あはれ
にかたじけなしと見たてまつる
はかりなきちひろのそこのみるぶさの
おひゆくすゑは我のみぞみん、ときこえ給へば、
ちひろともいかでかしらんさだめなく
みちひる塩ののどけからぬに
とものにかきつけておはするさま、らう
らうじきものから、わかうをかしきを、めでた
しとおぼす。けふもところもなくたちにけり。
むま場のおとゞのほどにたてわづらひて、上
達部の車どもおほくて、ものさはがし
げなるわたりかなとやすらひ給ふに、よろしき
女車のいたうのりこぼれたるより、扇をさし

どやとき[illegible]乙度居よそ
た右の為端まへ又月の[illegible]
射の時中少将の[illegible]府まろ
[illegible]賀茂の祭大内の時を
[illegible]陣ありて一条と[illegible]とを
[illegible]よ[illegible]の乙[illegible]の[illegible]
どわかりて
[illegible]りきえんと　孟　源内特
わか[illegible]どきりてまきまへとく
いかるきりのあまへと
源ゝて車の中なれハ源ハ[illegible]
此内侍と[illegible]りまわて
人うあしや　細　葵ハ[illegible]
[illegible]ひとよろ[illegible]のゆと
と[illegible]ことハ[illegible]の葵の[illegible]を
てそ[illegible]つるよ今日車志
[illegible]よれさ[illegible]く　暁日
志めの[illegible]ハ　細　[illegible]
[illegible]ハ[illegible]よ[illegible]て[illegible]
孟　[illegible]てしん[illegible]ハおふ[illegible]あめ
内とハ今の[illegible]よ付て[illegible]
[illegible]の[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]さ[illegible]源氏を

ぞく人をまつきようちてかやはしき給
[illegible]ねあさりきえんとこきてしかハいるわ
[illegible]まのあまへと[illegible]されてあをけまする
わ[illegible]なれバ[illegible]いませさとまで[illegible]給
[illegible]とてわぞしわくこさ[illegible]なんとのあへはし
あり扇の内まかわりて
[illegible]なしや人のぞきうあふひゆ人神乃志
[illegible]のを[illegible]と給きむ志[illegible]のうらまえとあるて
そ[illegible]と[illegible]いつまでの源あハし[illegible]をけなりそりお
さまし[illegible]こくをいまめくれとわくさまハ
[illegible]
[illegible]
源　[illegible]しけるれぞあるまかも[illegible]

花　注連のかとりかるまあれハ注連の内もまへ[illegible]
うきしけり　河　八[illegible]氏人とハ人の氏性のわかさる[illegible]
さ[illegible]くとる[illegible]とく八十氏人とハ多くの人[illegible]
このあふひあといとしもへし達日とハ[illegible]
とう[illegible]くまあうど葵と[illegible]よこ[illegible]
犯　後撰第四賀茂の祭の日物見人[illegible]
てそよめむあふひてふ[illegible]を[illegible]
せうし　師　云事根源云神の告ありて人々葵を[illegible]
みやしろを　孟　あふひハ名[illegible]
かあふひとあつつらゆく[illegible]
まハ不遁よ也[illegible]
也源内侍[illegible]　師　人[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ人[illegible]
ハ定とふ[illegible]人[illegible]也
まぶれぞ[illegible]　細　[illegible]花[illegible]
[illegible]式[illegible]とひとんバ
車[illegible]人[illegible]方
の[illegible]の紙の[illegible]
[illegible]を付[illegible]先　今[illegible]乃
[illegible]をハあ[illegible]
それて車の中に几丁の帷
[illegible]くるよ[illegible]て[illegible]
びらひの[illegible]　細　[illegible]

かやしくもあうぎきられてやの[illegible]してん今
のあかち草葉ぞうつとさ[illegible]あひとあひ
のりてをぞされをぞるあげ[illegible]ねとふや[illegible]
うらふ人おほうらひとひのはあかさ夜のうろ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

世界の人思之源内侍にハ非す　花 此後日の源の御出立のうるはしかりしにけふはうちみだれてありき給ふは
いかなる人ならん　細 源のみかくれ給ふ人と云ふ　三光院説源氏なりしにけふはうちみだれて
ありき給ふぞ　源内侍ハ人のかざせる葵といひし源氏ハかざしけるとあれど
源のかたきをいふを源のかざしとらく
さう〴〵しくおぼせど
孟 女のかざしあらそひ
かやうにいとおもなからぬ人はた　今
宗祇云不審也　源内侍がごと
くおもなき人なれど
別の女車に源氏よりあひ
のりたまへるにつゝまれてかりそめに
もいらへをきこえむもまばゆし
て おもはしからぬ人も
ねんじ　弄 源内侍ハおもなき人も
かたき人あはせさすがにつゝまる人は
そこあひのりある人に
きこえて心やすくもあらす
めがたり 孟日 御息所のありさま
まゐるにつけても常に
誰ならんのあひのり人は
うちわびしとおもふらん
なりにけりとわびしき
まのあたりに

しあらそひかなとさう〴〵しくおぼせど
かやうにいとおもなからぬ人はた人あひの
り給へるにつゝまれてはかなき御いらへも心
やすくきこえんもまばゆしかし御息所はも
のをおぼしみだるゝこと年比よりもおほく
そひにけりつらきかたに思ひはて給へどいま
はとてふりはなれくだり給ひなんはいと心ぼそ
かりぬべく世の人ぎゝも人わらへにならん
ことゝおぼすさりとてたちとまるべくおぼ
しなるにはかくこよなきさまにみな思ひくた

息所のありさまを人やいはん
人とく
とゞまらんずべかめり　細 河海ハ
思ひさだめて心ちぞまよふ
まよはれし
つりするあまの　細 古今 よみ人しらず
引寄之伊勢へ下向せずば
一と定めて給ひし
伊勢の海に釣する海人の
うけなれや心ひとつを定め
かねつる
めでたきうけハ釣の糸の
浮なり
孟 息所の伊勢へくだらんや
とゞまらんやと思ひ
まよひ給ふ心のうきたるやうに
ものおもひのあまりなやましく
なり給ふなり
大将殿は御息所を
とゞめ給ふべきにもあらず
又下らせ給ふべきにも
あらず
御息所をさためかねて
あらみる一つの事にて
まよひ給ふ

すべかめるもやすからず釣するあまの
うけなれやとおきふしおぼしわづらふけに
や御心ちもうきたるやうにおぼされてなや
ましうし給ふ大将殿にはくだらせ給はんこと
をもてはなれてあるまじきことなども
さまたげきこえ給はずかずならぬ身
を見まうくおぼしすてんもことはりな
れど今はなほいふかひなきにても御らんじ
はてんやあさからぬにはあらんときこえかゝづらひ
給へばさだめかね給へる御心もやなぐさむ
と立いで給へりしみそぎ河のあらかり
しせにいとゞよろづいとうくおぼしいれたり

ねうしね身をつきまつらく
はちでらふみおしまゐる列く
みるさの 車あらそひの日のかく
ハゆうのから知く 万葉に 継身とつまり
されどやくしたまさ
細平を含比すりこし 源
もあこハことよおもてあ
とく 師 葵上といふて御
むまいれまらぬやうよりて
られたさぜやうとしたまさ
さきへまくられまへるとなんと
物の霊とそ代が 細河海抄
仙家窮鬼故謂之淫人夢
魂魄鬼霊言我心中之憶
此十娘怨而許夢見憎忽
此鬼竹夢記哉故闘之日
窮鬼也韓退之窮鬼ハ
いかつれうく 甲 生霊也云
みよし霊のやうし 孟日
ま後くのゑのりまろ
孟られくしえし 師 ちゃ
しにうりて尓衆しつく
くこの霊ハのましとし

呼 源氏よりさあ心とふへ御名代の御しうし 師 此下向とさ申らけ
孟日 細河 大掌含を御継とハ其の御継とせよとの註也
師 此御役とは継とさきことむとの
うちく葵上 殿よハれりのけめさるいくまつりひ
東宮に生まれ給ふ おくまんだ これも尓ろく御しかけくよ 源氏の君ひめ
もとまちもわられさしく かくし 釣んならさ此かれハ二条院みもとさくてき 葵上の方よりもさ殺へ
さとゆへけり ちうり侍さはいんどやむごとかきこハてと
よせひかさくしあさる人のめうちさきこと 細 懐姫く
さんそひまつりはやとかれハぞつからそうち
源氏のく ゆかりかげをそさまほうやさむやかしきよれ 源の方
それも御継わらく さるまて此かりとかさそと侍りのけいとこれ
ぞさまかなしいふりの此わりくかさそさ後くの名のり
生霊之 もうかよんはさうしにうつしぞなうて身川

くこの霊ハのましとし
葵上の御身とさるれぞさ
まし葵の上といやますて
まくもなく頼んかるさ霊を
めらしきけんさ 孟騎 騎者也
物のこし向をまへといふめて
大将の君乃かりしひとまろ
御 源の御かもひまふ雨てと大
殿るさの病いつまよりくと
こおつりく
二条の君かすこつり
細 此家よこりく御さる此所を
人いふ そとく疑し 呼日
わこきよからきれかさき
かしまうにろうて依と云
霊もそしきさしてかうき葵
文の此桐をとりふかやの人
もとろしきせ
恵うにみりのあと 病人
葵の上れあとれ死より
しかその霊又あるひは死
大臣殿よつへさらりの
なる臣よりのうごしにうるみ
ありての霊かずくし

の此身よつらそひさるさ病めくくことよゆかろ
くしうよびつくしきてあるこしも尓めれど。
おそきち見をる尓てさりりすさこりのひと川
あつ いつじきけんさたよもたさうず。さらね
さいまやめかびろけの御よおしんとえてこら。
大将のこ後よへさしぬく
ご将の君ハれハしひどしつこりしことかば
大条れ妻病く
しあかりまうみくやもと雨二条の君かどしハ
源氏の大将よ思かりもと女房達
うらてそいとひんでの病よハかりうちさめ
病妃の名 ここ
まぐ依のうろとあつらあしけくめるそ猫を
おさるひるとの病気
どうつせあへどそしてそしおうこより
しりのけとてもわざとかうきれることさ死
あうりなかしもさこれうる此めのし心つ人ど
先まうこそさめにうつてのさう 葵たまさく

あくつくし、
細　物のあはれ
御心か葵の御こゝろのあはれ
志まさし

いとゞかしげなり　抄　葵の事
しおひまつまてかね[illegible]
の[illegible]ぬくれさ
合[illegible]

しかやのはてにもつけてはさこそ[illegible]
[illegible]

その夜はつきすても
細　人の[illegible]

[illegible]

人の[illegible]
[illegible]

のこゝろ[illegible] 細 兄 [illegible]
御息所の[illegible]
息所へ[illegible]
細 御息所の[illegible] 師 前[illegible]
[illegible] 孟 [illegible]
[illegible] 御息所の[illegible]

思しのどめたる御心ならばいとうれし （御息所の詞也）
うなんなどかたらひきこえ給ふつねよりも
心くるしげなる御けしきをことはりに
あはれに見たてまつり給ふうちとけぬあさぼらけに （源の心）
出給ふ御さまのをかしきにもなほふり
はなれなん事はおぼしかへさる （細 御息所や[illegible]）
やんごとなき方にいとゞ心ざしそひ給ふ （細 葵上の懐妊の[illegible]）
べき事もいできにたればひとつかたにおぼし
しづまり給ひなんをかやうにまちきこえつゝ （[illegible]）
あらんも心のみつきぬべきこと中/\物思ひの （細 源を[illegible]）
おどろかさるゝ心ちし給ふに御文ばかりぞ
くれつかたある日ごろすこしおこたる （細 文の詞也 葵上の[illegible]）

袖ぬるゝ　細 御息所の哥也 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 孟 [illegible]
[illegible]
細 [illegible]
[illegible] 孟 [illegible]
[illegible] 孟 [illegible]

心ちのにはかにいとくるしげに侍るをえ
ひきよかでなんとあるを例のことつけと （細 [illegible]）
見給ふものから （御息所の哥）
袖ぬるゝ恋路とかつはしりながら
おりたつ田子のみづからぞうき （細 [illegible]）
山の井の水もことはりにとぞある （御息所の文の詞也）
御手はなほこゝらの人の中にすぐれたり （源氏の心）
かしと見給ひつゝいかにぞやもある
世かな心もかたちもとり/\にすつべく
もなくまた思ひさだむべきもなきを
くるしうおぼさる御かへりいとくらう （[illegible]）
なりにたれど袖のみぬるゝやいかに
ふかゝらぬ御事になん

[illegible]

袖のぬるゝや　細 山の井のあかすしてわか袖よ　お 袖のぬるゝや心よこくわれて泪を
よりてよるへしといふて あさらぬとハ不猶深くの心のあさからぬ事をいへり

源氏方 あさみにや人はおりたつわが方は身もそ
ぼつまでふかきこひぢを　おぼろけにてや、この御
かへりをみづからきこえ給はぬなどあり。大殿に
は、御ものゝけいたうおこりていみじうわづらひ
給ふ。この御いきすだま、こちゝおとゞの御
りやうなどいふものありときゝ給ふにつけて
おぼしつゞくれば、身ひとつのうきなげきよりほかに人をあ
しかれなど思ふ心もなけれど、もの思ひにあくがる
なるたまは、さもやあらんとおぼししらるゝ
こともあり。としごろよろづにおもひのこす
ことなくすぐしつれど、かうしもくだけぬを
ど、はかなき事のおりに、人のおもひけちなき
物にもてなすさまなりし御そぎのゝち
ひとふしにおぼしうかれにし心しづまりがたう
おぼさるゝけにや、すこしうち
まどろみ給ふ夢には、かの姫君とおぼしき
人のいときよらにてある所にゆきて、とかく
ひきまさぐり、うつゝにもにず、たけく
いかきひたぶる心いできて、うちかなぐる
など見え給ふこと、たびかさなりにけり。あな
心うや、げに身をすてゝやいにけんと、うつし
心ならずおぼえ給ふおり〳〵もあれば、さならぬ
ことだに、人の御ためにはよさまのことをしも

おほ人 日本記「梅か枝まてゝひらく人の鶯のうた」
人の心にあまけは 此あつまく人の身のあるさまてられハ 此集不の事よ
なつかしつるなしとかく
人のいとうくにろくよしろ
つかさともへきさよらならし
とあわらそく
いひつけらるゝ 此集家の
事又大臣の事なとい
に付らるしとめられ
四つも抱をけり 細思ふ
とおつゝに抱を思ふり出ハ
じとくより思ひやさしぞ
然ありしるらけり見すての
集家の御事へ
さらぬハしをめよ 細いさゝかの
のためにおほすん人めよの事
との佐国にのかまへんるうと
大臣のさらにまる集の宮に入
まうゝとなし 河九月節支

もいひ出ぬ世なれバましてられいとをくいひ
なりけるべきことうらだちともかいてな
しらうたゞもちてしもの世をかなしかりてのちに
うらくこのことはよのつねれことなりけれど
人のふるさハつまぬゆうしうなくの
残多かさうしとおしくさしとりひつ番ゝ
るべきをのうへにもいてつまゝまちて
いふぐるもとうけ常しじと出がりつくそども四ふ
抱をなり。歌名はいそうらよ入すふ色う八しを
きぬくさう、とありて。供秋つり給九月にて
いやがりくのなにはふ川ろひあへられバひの

主殿寮 斎王卜定之時自九月一日至廿日
野のみや 和 伊勢斎宮の野宮ハまことに
て斎宮と云ハ伊勢斎王のうそ也
こらびの此うらし 細 野宮へ入させ給ふ
まへんとても又野宮よりへ入らせ給ふ
後ハ斎宮本くわうし
まゝ人のかうしきさ
おゝ斎宮の御人ゑるべし
斎宮の司の人うれハ諸
のわかりんへし
御斎宮の信うきとハ
職原抄云 伊勢斎宮寮
頭一人 相当従五位下
四位五位殿上人兼之 諸
太夫任之
助 権 相当正六位下
允 大少
属 大少 これらなく

はつ人のいそぶところなねておるべきなをよむあ
やしく けりくしうあめぼくくれいのりなど
ことなど文人いうどもさぶつめくれいのりなど
きぬくつうもりて家ねくうゑきこさうす
いあしげそれうとかしくまつりひて月日を
もそうし給おりをつりまつりひきそくてあへ
どまつうさのいそうもつひめへひけこうろ
のいに海なげなり、まかさうかべき月どまもあ
らをとなれ人をとしありを給へつる海はやれるし

さまうのいのりてうせしれて
さたうちまうねぎ是みかう
読きよいのうこの調伏され
てこまうを物をそく
そうしゆうへまへや
物のけのいのりもうく形を
らうしゆうわれれのこし
されいよわうやうわりん
お読ふいうもよいのうしせ
られて物のあれゑべきこ
とわうまやかうし覚ゑ
しげよふくまうるか何よ
葵の今かくとしまへハ源氏
は選えしおふうやとせを
用捨して退きかへし義なは
みさい便く　細
法華経　敏達天皇六年
渡本朝羅什三藏譯又
推古天皇御時聖德太
子迷持法花経等追渡
小野妹子ニ

さこわうて かやうにまへど、いかじきされいのりのれる
ぜんげんとして世ませまへれと、例のしうねき
物のけひとつさらにうごかず。たへだとなきき
げんざども、めづらかなりとめでかなやむ。さすが
よいういうてうせしれ、心くるしげになきまどひ
ひくぞとらしゆうへまへや。大将によきこえへべきこと
あとのまふされいよわうやうわりんとて
ちうさとこちりけりよつれそまうちうちむげにかぎ
つまのさ御よよめし給ども。御わうしささ
とまむするまやとそゆくでもえもこ
ゑぞうう給つうぢのそうとわこ家きい
法花経よみいとう

源のことばも　細 葵上の霊
れう(?)かくて源氏を(?)すゝむる
詞とも(?)聞えて五日
かゝる気のあつかひ(?)
源の心中を葉子(?)の述ら
るゝ也

いつもとも思ふ心
物思ひは葵のなやみにて
なくさめかねつゝを見し
く思ひめかと源の思ひ
ての事也

かゝりける事(?)に
細 源は世上も世の人の人は終ま
しらず(?)もえ五日の心も
なにすくなりのゝふ心もそ
つゝ(?)葵のうへは　細　葵上
の事は一世と云ふすらしれ
たゞ今はすくさめての給ふし　五日
でありしや　細　葵上の詞
くれ(?)御息所の霊の入かはりて云
也　あれ後のよ(?)に物をもく
其の人の心とのたまふ
詞にいはれていはくらしれ

まみをいとたゆげに見あげてうちまもりきこえ
給ふに、涙のこぼるゝさまを見給ふは、いかゞあはれ
の浅からん。あまりいたうなき給へば、心ぐるしき
親たちの御事をおぼし、又かく見給ふにつけて、
くちをしうおぼえ給ふにやとおぼして、何ごとも
いとかうなおぼし入れそ。さりともけしうはおはせじ。
いかなりとも、かならずあふせあなれば、たいめんは
ありなん。おとゞ宮なども、ふかきちぎりある中は、
めぐりてもたえざなれば、あひ見るほどありなんとおぼせと
なぐさめ給ふに、いで、あらずや。身のうへのいと
くるしきを、しばしやすめ給へときこえんとてなん。

とて源氏をとひ給ふ
とのふく
此心は人の心は
御息所の心中也
細後拾遺　和泉式部
物思へばさはの螢もわが身より
あくがれいづる玉かとぞ見る
なげきわび　細　空の出ぬ
魂をむすびとゞむる
事を云ふとぞ
したがひのつまとは
下がひのつまを結ぶ事也
[illegible]
あさましう　人のとかく云を
聞にくゝおぼしてのたまひけちつる
を目に見すみす
かくのたまへど
[illegible]

かく参りこむともさらにおもはぬを、物
思ふ人のたましひは、げにあくがるゝもの
になんありけると、なつかしげにいひて、
なげきわび空にみだるゝわがたまを
むすびとゞめよしたがひのつまとの給ふこゑ、
けはひ、その人にもあらずかはり給へり。いとあやし
とおぼしめぐらすに、たゞかの御息所なりけり。
あさましう、人のとかくいふを、よからぬものどもの
いひ出ることゝ、聞にくゝおぼしてのたまひけちつる
を、目に見すみす、よにはかゝることこそはありけれと、
うとましうなりぬ。あな心うとおぼされて、
かくのたまへど、たれとこそしらね。たしかにのたまへと

宮の御ゆまゐらせ
大宮前にたゝし退去
らしめり今葵の上やうゝ
御孫御ゆがまじくおもひまゐらせ
まゐらせたまへし 孟 葵の父
孫よ一条院の母東三条院
まゐられまゐるこゝちもよく
るまいふものかつて世話
てまゐらせなどにもまし
めでたしめり御ゆと八坊も
そのことなるべし

山の座主
長元年六月廿二日始補天台座主号大僧都大師 細 義真和尚 天

まへばそれなりけりあさまし
とは世のつねなり人々ちかうまゐるもかたは
らいたうおぼさるすこし御こゑもしづまりた
まへればひまおはするにやとて宮の御ゆ
もてよせ給へるにかきおこされ給てほどな
くうまれ給ぬうれしとおぼす事かぎりなき
に人にかりうつし給へる御ものゝけども
ねたがりまどふけはひいとものさはがしうて
のちの事又いと心もとなしいふかぎり
なきぐわんどもたてさせ給ふけにや
たひらかにことなりはてぬれば山のざす
なにくれやむごとなきそうどもしたりがほ

いまはさりともと 抄 葵も今は別のことあらじとおもへるなり
細 誕生の與
……
細 三ヶ夜より
記内則篇云國君世子生告于君接以大牢 注云 接讀為捷捷勝也謂食其母使補虚強気也 又左傳桓公六年傳曰九月丁卯子同生以太子生之礼挙之接以大牢
細 家の男

にあせおしのごひつゝいそぎまかでぬおほくの人
の心をつくしつる日比のなごりすこしうち
やすみて今はさりともとおぼす御ずほふども
はまた〳〵はじめそへさせ給へどまづはけう
ありめづらしき御かしづきにみな人ゆるべ
り院をはじめたてまつりてみこたちかんだちめ
のこるなきうぶやしなひどものめづらかに
いかめしきをよごとに見のゝしるをとこに
てさへおはすればそのほどのさほうにぎは
ゝしくめでたしかの御やすん所はかゝる御あり
さまをきゝ給ひてもたゞならずかねてはいと
あやうくきこえしをたひらかにもはたと

きけハわろきさまにめし定
らぬ恋せしらんことゝ人
る中　御助字也
御そなども
細　邪気の護摩の香に芥子をたく
くゆる香御息所の身にしみつきたる也　河　邪気の
おり様の時護摩に芥子を
まくゆへにその香邪気
をしりぞくる
御ゆするまゐり
細　髪あらふ事也　河ニ史記ニ
沐の字をゆするとよめり
孟　御息所の髪を洗衣裳
をきかへなどしても其香う
せぬ也
いとゞ御心がハりもまさりゆけ
細　御息所の心のくるし
さかぎりなくいやまされば
[illegible]
[illegible]
[illegible]

としごろハいとあやしうわれにもあ
らぬ御心ちをおぼしつゞくるにぞ御ぞなども
たゞけしのかにしみかへりたるあやしさに
御ゆするまゐり御ぞきかへなどしてこゝろみ
給へど猶おなじやうにのみあれバ我身なる
だにうとましうおぼさるゝにまして人
のいひ思はむことなど人にのたまふべきことなら
らねバ心ひとつにおぼしなげくにいとゞ御こゝ
ろがハりもまさりゆく大将殿ハ心ちすこし
のどめてあさましかりしほどのとはずがた
りもこゝろうくおぼし出られつゝ御とふらひ
日ごろもへにけるも心ぐるしくまたけちかくてこそ

護摩の煙にしみたるや
細　葵上ノ死の人をかりてなす
御息所とさとり給ふ

いと後人にまうでも　御息所ハ久しく無音なれバ御息所もいかにと思ふらんと下心わりなく
まうでんハいかにぞやうたておぼゆべきを
を
細　御息所へ文ばかり参らする
なり
御ありきもなし
細　此程も源のよそへの御ありき
もなき也
これハありさまにて
細　葵上若君誕生ありて
葵上ハ病者のお産なりし
ゆへ　左大臣威勢あ
る上源氏むことなれバわ
か君の人おほくあるまじく
時に大臣家もいかにすくろ
ひおもふ時からなれハ盆を[illegible]
く理なく葵上の御事ハい
まだならねバ此物語にハい
つも此心あるべし

まうでんハいかにぞやうたておぼゆべきを
細　源氏の心　師抄ニ委
人の御ためいとおしうよろづにおぼして御
ふみばかりぞありけるいたうわづらひ
葵の事
し人の御なごりゆゝしう心ゆるびな
左大臣夫婦の事
げにたれもおぼしたればことわりにて御ありき
もなし猶いとなやましげにのみ
葵の上の事
したまへバれいのさまにてもまだたいめん
葵と源氏の御事
夕霧の事
したまはず若君のいとゆゝしきまで見え
源氏を見てつきまとひ
たまふ御ありさまをいまからいとさまことに
左大臣の心
もてかしづきゝこえ給ふさまおろかならずこと
孟　志紀熟悉
あひたる心ちしておとゞもうれしういみじ

ことわりいとしかりし
細 たゞ今の男子のあげくる
まいなくなし 十余りまで
この思しう 抄 夕霧
東宮冷泉院に似まゐらするより
まづ恋しう思ひ出まゐらする
なるべし
忍びかねたまひて
葵はうとく御対面あり
さきと源の作りたる
それよりひとへにえんなり
物ごしにてなどあべきかは

とおもひきこえ給へるに。たゞこの御こゝちおこ
たりはて給はぬを。心もとなくおぼせど。
さばかりいみじかりし名ごりにこそはとおぼして。
いかでかはさのみは心をもまどはし給はん。
わか君の御まみのうつくしさなどの。春宮に
いみじうにたてまつり給へるを見たてまつり
給ひても。まづこひしう思ひ出られさせ給ふに。
しのびがたくて。まゐり給はんとて。うちなどにも
あまりひさしうまゐり侍らねば。いぶせさに
けふなんうゐだちし侍るを。すこしけぢかき
程にてきこえさせばや。あまりおぼつかなき
御心のへだてかなと。うらみきこえ給へれば。

げにたゞひとへにえんにのみあるべき御中にもあらぬを。
いたうおとろへ給へりといひながら。物ごしにて
などあべきかはとて。ふし給へる所に御座ちかう
まゐりたれば。入て物などきこえ給ふ。御いらへ
時々きこえ給ふも。猶いとよはげなり。されど。むげに
なき人と思ひきこえし御ありさまを
思し出れば。夢の心ちして。ゆゝしかりし程の
ことどもなどきこえ給ふついでにも。かのむげに
いきもたえたるやうにおはせしが。ひきかへし
つぶつぶとのたまひしことども思し出るに
心うければ。いでやきこえまほしき事
いとおほかれど。まだいとたゆげにおぼしためれば
こそとて。御ゆまゐれなどさへあつかひ

いつもひめしんてよく
としに何ゝすと 細 としころ
うとくしうりしと源の御
御心何も不足もなき人
とおもり 抄 かやうの物うし
源の上の夫ひとり葵の事
くるしみさ常ねなり

程やらくん給ふく
いよく御ゆ気まさりて[illegible]に
御物怪ありて常の御座
をよりそ 抄 かかりしまさ

あかりりく 細 母宮のあたり
まかさうすき人のやうにあれ
ひまなどいかし 師 大宮の葉
こどもするさこそかしのやう
よあつひあそくへそれ[illegible]
よ大とさハむつさしく[illegible]
係るさとの[illegible]人
ハかハなしいふうらし
つひよりハめくめ給ふく
細 葵上の源よ同じとめ
て又[illegible]給ふく 明 葵上の源
氏を見て又[illegible]表く
秋の[illegible]さめし 細 八月く
[illegible]見を[illegible]を東宮[illegible]
同とふ。除目ハ天武四年
正月よ始る 師 春の除目
を縣召と云[illegible]ハむしのて
外官として外国の守なと
縣召すてを任せらる。[illegible]
秋よわかさめしとふ[illegible]秋
の除目と京官とふむね
と京よある[illegible]司を任
さるゝ[illegible]を同[illegible]と
[illegible]任き[illegible]のる

律すしひ給ふんと人て哀ゆりきこすられて
抄 是より葵
の病中の事をいふ
しげすゑんのいとうまくらりそこうくれて。
きうけるさの年変(けしき)あそてつきえるさ俄いと
らうきげよりもおぼしけれどのきぐれさ
方もぞうしすくちくとられ方枕の月ぐ。
源の心
わりでうきまそこ経れバどし比何ゑすとあわ
ねこしありてゆすひつへんとおやちさかそて
源の葵をく 細 源の見し 抄 葵へのと[illegible]
くらすれ給院などよ御ありてにとぞく
まぞなんがやうめく出ゐつうなうし給へそ。
細 母宮之 師 葵にをひにわかく
まうへられしうゑべきは家の律と比つぞまう
[illegible]
よ全おくやとつてうそもどくつうとくるさ
と扨やてりくかつうくゆ月しあつて。例の[illegible]

あし[illegible]よてそわかりわくりそなしめへば
くへうらくてりのし給ぞなしきそてどとき
源の事[illegible]
すてぞいとさりげよしちすぞそて出ぬ
葵の事[illegible]
とづねかりいめどめそいふてあるへ
里秋のつきめしあうべききこぞめて大殿
[illegible]
まうすへい恋ぐさもいつさらんのぞく給ふ
どもありて殿のおわたりそすれあうらのぞ
葵の[illegible]
おむそうきもあねどのくうらへ見くるよとめ
抄 [illegible]
やるる様に俄に例の物むねなどにわけ
てうといくまどひ給ふらふにはをそうそ
抄 是の
こまそく給御どぞるすくいりうねあ
退出[illegible]
どそくしめそしどくまうそて給ぬれぞ

而もあり私に勿論なれ先秋のつきかしとふかくや月にハ涙月の趣名ぞやれ酒酒に盃し
さうりのそこ結 細 人へく月の前とも有く 河 以テ労望官の如し
〜らまかるへしそこに
こえりのふたら 妙 内裏ニ左大臣の花くもおなし人もみおもふくもおきあく葵の
山のかすみなまそれ
山の鹿こそなまられをやむて 平千方
とまて僧とも来てりなまに
あきそのらひつくいそう
左彼の書籍あり論ぶあて
とおもひし秋中きれへなひ
むり人て紛議させなさや
をなしらく
まのうち件人批判ハあさく
まきらふ 私 細 齋忌しらう
さ海し公羽学死政治にも
あり極みても人みも行わ
きうらく
由るうきらて 河 勤ハスル
セスル
縁目 日本紀 師 勤さき
さうくさ海く
本於なとゝもさるかくる 細 死
人ハ有るへ佐とかゝる事
見えしきぬの身わくゝ
してあまくあふくかみ葵
生かやとて我をめとて
てあまねく我をとるハ藤
生まれて
各務そのへなるものゝ子は事を
そへて ないしきみハ葵の
事ハなりとそへて八六宮息
本の是なりしあひしける
とおもりおやうのるすを也
二く南て世の中をやく思ふ
みあつて
さとるゐぬれわから 深のそ
よハ也しめさね思ふ人生の御
よりひとりの御息所の妻
のゆれるへてなききやう
よ思ひしらく
えりて吟りてしあ打らを
孟浪ハうれ歌のりしおもえ
都る屋代のつまりと歌の本
よく思ひしてのまりつと
左大臣の御思ひ給く師入れ
しきもしうさまさひとの
そてよれぬ袖ハ御へなりのかた
ほやくらりのみ 細 藤壺

ちりくれ秋かりけれまして出くつまりたり紀伊さりり
されハされかはやかれさらやうなるのつもりさりく
稲葉につゝりれハ山のさすかなよられの僧
さらをえさうしめへ給ふらしきことハさりとも
と思ひし白くらつりよあさ日のしくれへとのく
ちらの今よのまそあかりおとしよ雨くの水とよ
らひめつりひるしく立よられしえ遣しつくさ
ゆまりさちていとしきれかなしひともは
地そうしさまて見る絵れりのくけのさひく
とりいれさえまつりしま地して出花なと
とまれりし二三日ほとそへまうりまへとしやくし
つらきりくれのあかれハかうさりと地得りく
つれとはされをくりてましと霧深ハなかし
きことよ世中をいそへて世中をいとしうきれの
よ地かりしたみめれさてすくぬれわかりの
さあひとありらうしとのそ思へてれ
ほさて深よ地かりしけきさあらひうさせ
結さ雨えりて物もくしけるをよれ
ききもおしつまて地そくハれ調のやしまなし
人のよはあさらひくいかしきらくとも
とゆきやうり給ふ座く神さことなく
かれそこなかれ給ひしりのこともみかく
をつきを涙地かりしまとへるそ給すくて

りやあるとて御くのゆ
をし給ふは日ごとに給ひてそ
こなたかなた
鳥辺野にゐてたてまつる
葵の上へ葬送のこと
細 葵上死去八月十四日の夜也
葬送ハ廿日あまりなり
院をばさらにも申さずきさ
いの宮春宮 抄 桐壺院御弟
つぎの方 春宮 冷泉院なり

そこらひろき
細 文選第十二郭璞江賦 注云
云神蜮蝹蜦以沱游
神蜮ハ蛇也蝹蜦ハ行皃也
又日本紀ニ豊玉姫化
為八尋大熊鰐匍匐逶
蛇 以是をたとへしもの
く皃く足もとくもころく
こゝろひ行皃也

よはなれば、いくらのこゝんとて鳥辺野にゐて
たてまつる程、いみじげなること多かり。
こなたかなたの御おくりの人どもてらぐ
の念仏のそうなど、そこらひろき野に
所もなし。院をばさらにも申さず、后
の宮春宮などの御つかひ、さらぬ所々の
もまいりちがひて、あかずいみじき
御とぶらひを聞え給ふ。大臣はえたちあがり給は
ず、かゝるよはひのすゑにわかくさかりの
子におくれたてまつりてもごよふこと
とはぢなき給ふを、こゝらの人かなしう
見たてまつる。夜もすがらいみじうのゝしりつる儀

つねのことなれど 細 ほいなりや
うに人の方へめぐらぬとのへらし
こともなげくして 抄 葬送ある
ものは何いつまでもなくあり
るべくあれと源ハなやかなる
あるべきあはれなく
人ひとりかあまたしも
細 人ひとりとは八夕皃上を
云ひ又夕皃上にてなりし我
さうへ 孟夕皃の外ニ
のまを不見給ふく
八月廿日の有明なれば
細 哀ふかく見ゆる景
気ニ別ニ哀なり。此夜の月
のかげを見給ふいかならむ
晴
のぼりぬるけぶり のぼりぬる煙
し八葵の葬送の事也。其煙
のさまいづこともしれ
見えて雲の方に向き哀なる
そくもの哀なる
何もかものあはれなる
るかなあはれのつらき
抄 葬送の後車の内にそ給

しきなれど、いともはかなき御かばねばかり
を御なごりにて、暁ふかくかへり給ふ。つねのこと
なれど、人ひとりか、あまたしも見給はぬ
ことなればにや、たぐひなくおぼしこがれ
たり。八月廿日余日の有明なれば、空のけ
しきもあはれすくなからぬに、大臣のやみにく
れまどひ給へるさまを見給ふもことわりに
いみじければ、空のみながめられ給ひて
のぼりぬるけぶりはそれとわかねどもなべ
て雲ゐのあはれなるかな。殿におはしつき
ても露まどろまれ給はず、としごろの御あり
さまをおぼし出つゝ、などてつゐにはおのづから

七十七

しかふ見ぬ此の個よ敵よ
ねうしつきそしとあり　細 手まの根
るとそつるよは　なりきよ八見るを
わか海をつめ八
さえてとうかくとゆくとく
世をへて
師 葵上の宮に こいつるれ
くけるみうりき 伏見へ
しうく 御葵の御ことを浮
の今もひまゝく　面 三ヶ月服
ひかりて
世 細 本書の服の名く色の
薄き也 輕服く 卅日
わくゞ服ふくましうく
細 源の裁さまさらハ葵
上ハ重服なり今も猶そく
師 今云夫者準父母二服五十
日服一年
よきりあ色ハ　細 服ありて
宮しう服を見まるを
云ハ然上の衣 時以衣
の色に薄きをいう
呼 色ハ物忌を今もそ

葵上の御事
らられど給へんとのとこよ思ひてかしまさ
の殊畧を今服物のうし
アのとさひまつけてとつらしき給ひられさ
てまつれる世とへてらうたげなりしきりの
よそひてこそ給はずぬやしきこと
にばめる御ぞたてまつれるも夢のここちしてよへの
御ぞしそまされるを夢のここちして
さきだゝましかばふかくぞそめ給はましとおぼすさへ
かぎりあればうすゞみ衣あさけれど
源の歌
涙ぞ袖をふちとなしけるとて念誦し給へる
袖をふちとなしけるとて念誦し給へるさま
源の様
いとゞなまめかしさまさりて經しのびやかによみ給ひつゝ
法界三昧普賢大士
ほうかいさんまいふげんだいしとうち

めるゝし 細 間のなりきとおもらくるとしてえて左を羨よらう用しうとし
ほうかいさんまいふげんだいし 河 法界三昧ハ普賢菩薩の德也天台五佛頂懺 大師作 傳教
南無法界三昧普賢相又大唐西院和尚礼讃詞ニモ法界三昧普賢菩薩 大士
文句六大論称菩薩為大士亦云開士也 細 普賢ハ法界によくゆう不作と云ふと
とりて 呼 観音ハ慈悲三昧に住し給ふぐし
なふく法のの
細 源ハとく形見のまるゝ
うりせそ何よ思の葉をつ
まく 師 此哥ハ後撰集
よ兼忠うめのこそと
あさこで
御わざのいそぎなどせさせ
一 細 此物ハ彦方の經文を
なんしど思ふ事きりし事
の出来わるく凡此物語に
盛者必衰の理を明かく
出現さりと葵上ハ夕霧
を誕生ありて思事もなく
くすくなる人もよはりお
来るぞり 師 御わざれい
そぎハ七日くの法事く

うちのたまへるをこなひなれたる法師よりは
細 わかきみ 夕霧を源の
けなり。若君を見たてまつり給ふにも
なにゝしのぶのといとゞ露けゝれど 源の夕霧によそへて思ひ
かゝるかたみさへなからましかばとおぼしなぐさむ。宮は 細 母宮
しづみいりてそのまゝにおきあがり給はず 大宮の母君もあやうきまで弱きのさま
あやうげに見え給ふを又おぼしさはぎて 人々のさ
御いのりなどせさせ給ふ。はかなう過ぎゆけば御 忌中の法事など
わざのいそぎなどせさせ給ふもおぼしかけ
ざりしことなればつきせずいみじうなん。

なのめにかたほ　細　箸子
作許してかたほ　孟　尺寸の
ことは人のおやのならひ
細の人の親の分也
細　袖の上の玉のくだけたりけん　李文
不勝掌中之珠　奥入云　非本文云
霊之袖上ノ珊瑚とあるは
玉ニ喩　切なる心なるべし
所々には　細　御
御息所のふかくつゝしむ心を
孟　源氏はとり/\の御
御息所　孟八斎宮の御集
の注に
細　八月に諸司に
入て野宮へうつらせ給ひし大内の
住所八入野の宮へ細引出
さらに斎宮の御門へ入給ふ
みくさ也とやおはしまして
ある所に　河　左衛門府ハ
近衛ノ小垣ノ東廰
屋にておはし花香
細　いつくしき
いときよまはり　河　嚴
重シ潔斎之師　深葵の服

なのめにかたほなるをだに人のおやはいかゞおも
ふめるましてことわりなり又たぐひお
はせぬをだにさう/\しくおぼしつるに袖の
上の玉のくだけたりけんよりもあさましげ
なり大将の君は二条院にだにあからさま
にもわたり給はずあはれに心ふかく思
ひなげきて行ひをまめにし給ひつゝ
あかしくらし給ふ所々には御ふみばかりぞた
てまつり給ふかの御息所は斎宮は左衛門の
つかさに入給ひにければいとゞいつくしき
御きよまはりにことつけてきこえもかよ
ひ給はずうしと思ひしみにし世もなべ

うしとおもひしみにし
世もなべて　細　いとはしく
門の内をまもりなどふかく
つゝしみ給へば葵の上の
御事をも世の中つらくて
あまりいとはしくあはれにお
も深くおぼしいれば世をうき
物はかなしまずの葵の事に
まひれ息所のなげきつゝもの
てはあく世をはなれんと思ひ給ふ
ところなれ　細　時しもあれ
秋やは人の別れのさうらふの秋
きはまるあはれなるも　河　時
しもあれ秋やは今の別れさき
わがおもふ人の思ひを
念仏の暁がたに　細　こゑすぐれ
たるもなり
風のおとも身にしみけるかな
細　吹くればいつも身にしむ秋
の世とも　かくるにものとしおもひ
ふる　河　後撰集にあるなり

ていとはしくなり給ひてかゝるほだしだに
そはざらましかばねがはしきさまにもなり
なましとおぼすにはまづたいの姫君のさう
/\しくてものし給らんありさまぞふと
おぼしやらるゝよるは御帳のうちにひとり
ふし給ふにとのゐの人々はちかうめぐりて
さぶらへどかたはらさびしくて時しも
あれとねざめがちなるにこゑすぐれたるかぎ
りえりさぶらはせ給ふ念仏の暁がた
などしのびがたしふかき秋のあはれまさりゆ
く風の音身にしみけるかなとならはぬ
御ひとりねにあかしかね給へるあさぼら

の前ふくもふよ座し義
のかくらんやまろう見えさ
心身ちくもむく秋の心愁風吹
見えにかわい人の夜まさく
てかくとあくれさきちさき
ろや　時同
菊のかんれをあろ　細　盡開を
そろ　時　劬くけ候ちち待
かなさふし
こきあそふひの　細　もろふの
こころへ菊のうれ色ま移へ
るかなかつし　時　花田侍
声のましきかく　服老の
人の絨乃多く
さし来ていまあり　猿名
院御病えさしとさそいまく
と八御皇宗かの文にお好
し物しく申くやく是服
とゆらそてさしまきうろや
孟同
さらぬあとハ　猿名院御
院ニこころぬあどいとは
秋文のことまかり候

わかるを指うらて着任出つつく
けのもりわくれかかさくかなし枕なあら
えさよこそかあ秋あひかくてかくみそうけ
てさしとろそていふあかりいまめうしらもえ
とまへばうやもまあのれまかりがしね猿く場り
ふかしんや
御製
人の世をおもうれとてもあかけきまてく
あく袖をもひきやまさて今の花よおひ
まへあまつてすんとわりつねよもいてま
をういまつるうなしなもぞるよ盃ぞうこ絹物
がくうれなのれとふくひやとんくしさり
とそうきさうしとともすひ労しさうむもいふ
行く人の御名のうらめへきこしらと覚え

さて深の御前よりもさくに申分しあるらんとあれど此義可然所ならく　孟　時　花まさ
めしぬ雅を久の泪く深御皇宗へ此雅をわかちとくしさ雅よりひの不びくるれとを
わかれのるもしいさきとや　細　文の泪く人の歌ハ同よつくさのちさ着すなれハうの別とも
つへやさし雅とく
人の世を　お　葵のうすとれ皇宗の公男よ申てもおぼろなる深の袖の上うひやくそよの返
ここ今の今よ云ひのへあまらくるん
まつらひのへどりくし此ならを示まろ川さくかきまつり師わかつの名まさしそのふえ
さとてうよ盃かつう　細　との附かぶ此あろかのすハもくうるさされ北うち　どきうろさとえ
つれなの御とふしひやと　細　とのわ言てしをいろり　お　物の着よ　あまつる人のちうるも奥
て只今とかくるひまへさく
あおくさうるすどさふくと
盃袍の表現云しこえまえ
細　さやうよ言まま帝の是まま
ましとえつてとく人偽まは
ても以の心ぞ袍をとハ名し
きとく
斎宮の御さてよまつり
細　と斎宮ハ一段の行事
かりよ依て此稀変より
文をまつらせらるすもぬ
令と深のふあらひ給で
さうぶ色かし人ハともなくてもまろへとき
よこそハ袍し給ひめなかめさうことをさぶ
くとけさやりよそうてきんとくらやしささハ
わかれ思ふなぐりさきの紙え場り　かかせとまじき
かあわりし秋宮の御　さうよ海のりもまあう
つしるやかずと劬うしうおもひわつゝひすへぶわ
ぞとあかれりくりるすくをかざけなくやと

給ひし統はさうらん　花鳥
まうきはむかへりさんで
是よりも以下この行道
どれ当らもくいろりて
ひさぬると又さうくだとぶ
おありお是ハ御息所の文
相よきこく御衣ハ姫君
の中らんとおうよら御そ
それよりまさとやうかるへ
こうさくのいとくとみ姫君これ
といつる御くとふうらハ御息
所より御有も計ろ中の音
徒も中さぬとしいつる義と
そて御説抄　花細孟
の説ハ各別也　おさゝそハ世君
もそつ君も
のおりく由ハ消るもとあり
もかゝく斎宮君るれは葵
のかくるときちあそはひ
あへるもそうかきるすと云
て下のんいれ息所の指は
たまよおかうら道執念れふ
かまえ故かろをさくさうしふ

て。大将の君のかはめつるよ。こよなう御
なり
どく侍よろ代。御ひのへとこゝろぐるしう
源の服忌のすく
給ひし斎宮はさいしかば六年さん
とそなる
源氏君之
とゆう男を沸しめ御忌の世よ心
源を云之　葵を云之
らうん給ぞそうなるさいはいかしうて
あいしまくしれそ。これより

こしおり。里よかゝりけむ程なれいで
小　息所の六条　未摂の家之
細　前の御ハかゝりのよしを
てまく給て。御のめしまつる事にとしも
さりてとぞ云
よめしらくさ給てぞれはのとかく
細　御息所の気之
いとかくなるはいとかなき方れいさ

の御誓いさ以くりて一の子ハ此息所の物の家ありたりけりもとをとりのめし給へどもまらせ
と御誓の不審もなと此息所を御訓之孟晴日
又ハかゝりかたてよ　河　此宮の母后りはひろめの人と云也孟根をかゝりたせとそ　花何こ
とかよあふかる世よさのとかゝりハかくと云ハ物の宮を入ありふとくとおのめしいる由之
細　何もも世よんるとぞめ給ぞ根とのくをハおしきるりと文を云を説例のんく師花細是物
沸らんぜもと御やうらく道ありて　細　これはりと云付河内本かれよりてあり花る静筆同之
操所の文ハ自らハ御らんせず此ぞ給そのりくしを云んく云へ御れとも表紙ハ是あり
たゝうよおりも八宮まかの御ぞ御ぞ給ねおでハかゝりしそるらんやとをうけさられかりと
ハーしこらきも同しんとし　晴　服忌の方よりの文なれハ御給べをぬこりやをそし此文
かもとんをうきらくきぬりしとつあるう　細如れずんし　孟日
されバうらし御身まてもいたう　細　吾君よ出つるうへハ御なりけるといの思よとむむふ之河
ハおれやまちうすすをんやとくちんとかそろうくとふ之
こせんいうの御ありき
細　故前坊ハ桐壺の御門
の御兄弟也見弟よ
ても御弟とらへるきし
この斎宮の御ようを
帝へ御まよの御ひきあひ
とく
その御ありかさ　孟　御息
所ふを由へまかりあへと源
の給へくしとぞ　細　前坊
の御ハかりまうと侍へ給ハ

いつよ給さん。故前坊の御おなじき御こたちの
くしとおふかなるを。いとほしう　桐壺と前坊とは
きこえさせ給ひて。この斎宮の御ことをね
んごろにきこえつけさせおはしましかば。その
御ありさまをやうそてまかりあつかひ
などつねの御ことをそてやうそうらむ

此わまくに傍く内位ときを
しめして念比に申給ひ
ともに斎宮の事も御心
にかけられしのみならず
いと参りあはれしとも
されば大かたの世につけて
御息所とさうしたてまつ
はさりとも〳〵とふ新枕
むかしより名たかく
細 よしある人とのきこえ
並御息所より今を
これよふるまく
野宮のうつろひ
細 斎宮より野宮のうつりの会
ふし此宮のうつりは天子よ
しあつ人まてにくさと
よせなきらし　と源のこと
おもひくる

相帝より御息所へ
まへとしびくすしき世語しらずよ。いとあ
るまじきこと、おもひはなれにしど、かく心よ　細 此源のこと
似合ハざるよし
りほかにわかわかしきものおもひをして、つ
ひにうき名をさへながしつべきこと思
細 心をみださるさま
しみだるゝに、例のさまにもおはせず。
さるは大かたの世につけて心にくゝよしある
きこえありて、昔より名たかくものし給へ
ばのゝ宮のうつろひの程もをかしういま
風流なるさま
めきたること、おほくしなしつゝ、殿上
ねまめかしきこと
人どものこのましきなどは、あさゆふの霧
殿上人ゝ御息所へかよふ事
わけありくをそのころの役になむし
露わけゆく之
なじ聞ゆてもたいしやうの君ハことはりぞ
細 人々と源の理と申ての

〈細〉正日七七日九日
のをたとへ語る四十九日
よりうちをあけるのを
なるべし
まうでぬ内つゞくとおもふ
しかりあって三位の中将
細 源の此つゞくと葵の
兄三位中将になりし
て三まへのかたし　細 兄
中将も三位と称する家
まことに此ことなり
なまぬ聞く　細 うば殿とハ
ふるき　祖母殿とハ
東宮なると云てかはれし
ころし末の孫をいふや
の親なしといへり

かぞしゆまへてもしたる
しゆへハあくまでつき給へる物をもし
世中にあきはててくだり給ひなば、さう〳〵
しくもあるべきかなと、さすがにおぼされけり。
他の事ゆへつらくハおもひながらも之
御法事などすぎぬれど、正日までは猶こも
源氏の之
りおはす。ならはぬつれ〳〵を心ぐるしく
まして三位の中将はいつもまゐりつゝ世中の
真実なる事
御物語なども、まめやかなるもさらぬも、例の
好色の物語之
みだりがはしきことをもきこえいでつゝなぐさ
細 源内侍のことなる
めきこゆるに、かの内侍ぞうちわらひぐさ
細 源の詞之
にはなるめる。大将の君は、あないとほしや。
かろ〳〵しく云あなづりそ之
をばとのゝうへ、いたうかろめ給ひそと
いさめ給ふものから、つねにをかしと思したり。

かのいさよひのさやかならざりし秋のことなど、さらぬもさま〴〵のすきごとを、かたみにくまなくいひあらはして、はて〳〵は哀なる世をいひ〳〵て、うちなきなどもし給けり。しぐれうちして、ものあはれなる暮つかた、中将の君、にび色のなほしさしぬき、うすらかに衣がへして、いとをゝしうあざやかに、心はづかしきさましてまゐり給へり。にしのつまどのかうらんにおしかゝりて、霜がれの前栽見給ふほどなりけり。風あらゝかに吹、しぐれさとしたるほど、泪もあらそふ心ちして、雨となり雲とやなりにけん、今はしらずと打ひとりごちて、つらづゑつき給へる御さま、女にては見捨てゝなくならん魂かならずとまりなんかしと、色めかしき心ちにうちまもられつゝ、ちかうついゐ給へれば、しどけなくうちみだれ給へるさまながら、ひもばかりをさしなほし給ふ。

細 劉禹錫ヵ句を引へし 河 有所嘆 二首 劉夢得 庚令楼中初見時 武昌春柳似腰支 相逢相失両如夢 為雨為雲今不知 文穎 鄂渚濛濛煙雨微 女郎魂逐暮雲帰 只応長在漢陽渡 化作鴛鴦一隻飛 白楽天同時之人也 思人よそへて作れる詩也 師云 是詩ハかりて 奥入云 夢得 宋玉高唐賦序 昔者先王嘗遊高唐 怠而昼寝 夢見一婦人 曰妾巫山之女也 為高唐之客 聞君遊高唐 願薦枕席 王因幸之 去而辞曰 妾在巫山之陽 高丘之岨 旦為朝雲 暮為行雨 朝朝暮暮 陽台之下 旦朝視之如言 或本云 旦為朝雲と云句 宋玉神女賦に其詞あり 不審 愚案

孟 文穎

これは今すこしこまやかなる夏の御なほしに
くれなゐのつやゝかなるひきかさね
てやつれ給へるしもそ見てもあかぬ心ちそ
する中将もいとあはれなるまみに
なかめ給へり
雨となりしくるゝ空のうき雲をいつれの
方とわきてなかめんゆくゑなしやとひとり
ことのやうなるを
見し人の雨となりにし雲ゐさへいとゝ
しくれにかきくらすころとのたまふ御
けしきもあさからぬほとしるく見ゆれは
あやしうとしころはいとしもあらぬ御心さしを

河 濃 孟子細 [illegible]

これは今こまやかなり　細 中将は
夏衣 [illegible] 源は [illegible]
[illegible] 志の [illegible]
[illegible] 秘 守素の服も姉
妹の服 服忌日服三月とも
に従服なりとも一位中
将ハ夏衣の [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 源の [illegible]
心さしの [illegible]
紅のつやゝかなる　細 紅色
[illegible] 従服に紅の
袍も用らるゝハ長保三年
三月一日定子皇后宮心喪
ニ付堂関白強て火色の
下襲を [illegible]
より故事要略に其子細
見えたり　細 源の猶しまふ
[illegible] 中将 [illegible] 劉
禹錫ハ只應長 [illegible] 漢陽源に
[illegible] 葵上の物末

ゐてのたまはせ大臣の御もてなしも心
くるしう大宮の御かたさまにもてはなるま
しきなとかた／＼にさしあひたれはえしも
ふりすてかたくてものうけなる御けしき
なからありへ給ふなめりかしといとほしう
見ゆるをり／＼ありつるをまことにやん
ことなくおもきかたはことに思ひきこえ

師 葵の [illegible] 河 [illegible]
[illegible] 細 [illegible] 他人の [illegible] 源 [illegible] 姉妹の [illegible]
[illegible] 中将の [illegible] 八月 [illegible] 十月
[illegible] 細 [illegible] 訓 [illegible]
[illegible] 葵上の [illegible]
[illegible] 中将の [illegible]

[illegible] 葵上 [illegible]
[illegible] 源の [illegible]
[illegible]

枯たる下草の中に
細 竜胆なでしこ白き花の色よ
給ふ大宮へまゐり給ふて十月
孟式部卿勝之不見之十月
いかでこの夜をかへりて今
思ひ出されたるかなとて見給へと
君の御かたちよ咲たれば
とこ夜よ哀しうなるかなとて
師ふるきことをおもふ
ても花の名も猶し錦なる月
のさかりなりし
葵の上の孟も夕霧と黄葉の
形見よみるかな秋の
読み給ふ葵の上の
かなし夕霧の事也
こハ夕霧也秋の葉
とか細 葵上
より此うた夕
夕霧ハ源氏の
遺衣の如く此給
如くひめの君の

経給ふなめりかしとみしるにハいよ/\くち
おしうおぼゆよろづにつけて光うせぬる
心ちしてくんじいたかりけり
かれたる下草の中にりんだうなでしこ
などのさき出たるをおらせ給ひて
中将の立給ひぬるのちに若君の御めのとの宰相
の君して
源氏云
草かれのまがきにのこるなでしこを
わかれし秋のかたみとぞ見る にほひおとりて
や御らんぜらるらんときこえ給へり
げに何心なき御ゑみがほぞいみじう
うつくしき 宮ハ吹風につけてだに木のはより

らんこハ源氏の君
木の葉よりも
かや嵐吹荒の木葉
さまし めでたくて源の
細 花宴の
夕霧ハ葵の上の源氏の
けにもろき御なみだハましてとりあへ
給はで
大宮
いまも見てなか/\袖をくたすかな
かきほあれにしやまとなでしこ 源氏之
なほいみじうつれ/\なれば朝顔の
宮にけふのあはれはさりとも見しり
給ふらんとおしはからるゝ御心
ばへなれば くらきほどなれど きこえ給ふ
たえまとほけれど さのものとなりにたる
御文なれば とがなくて御覧ぜさす
空の色したる唐の紙に

いまもみて
細 孟月
細 あはれのな
くさめ
の花の衣
かたみ
さ
かりよ
細 源より
河さの
と云
れ
里つ
さ

それハ治鏡を見るとまくとの侍なとぞのうまうね中ハ文ちらかりしもあつまりこさうの
されど此權の姫君ハつ重るき物のうちくの世るきとなりこさるくぬき侍よし給
ふとく常にをわりさめりのとハさまくありのよみりつまさるめあひさるくもまやと
出つ出り
わすてこの　細　下の句權定
まくりそしめりつれるすくて
経ありりし　師此歌の姿
の趣備と權の姫君まよ
然へまふべきことりよハわ
らねどおもゆ趣備をおり
されハ自然ま心よく心をこ
りりさる流　細　給無月いつもいつも
阿敏ハ　引お統計ヘり
阿　給無月いつを阿敏ハよろ
しうくう神ひうつおり
ハまうらうさ
由てあじのへくめて
細　心をすさ思ひよも一段と
わくら所りく本統し
出なくら山を　細　題しらず
の詞く　花見統大内山は
いよいよのうし　大内の貞云
注
わすてうの蕎こそ袖ハ露かれ趣をふ秋
　おさ源の玄とらろうかゝり
ハあさへぬれど心河を阿敏くとあり
てかどの心とどめてかう給へるつれよまく
　細此源世ハ寄てかく
よ宿ありてむら心うぐくるき経なりとく人
　權もおりし表よ世ひのふく
しころくしうりしうさ出隈されるれハ秋源
　世済く
こめりて居ふるしとゑく
うち山を世ひやりきそくあづしうるへやん
やへく
おりおの表らう
秋ぎりのまよふとそれぬともくしるり
　そう
しぐて空をいづくとそ世ふとのまほのら
　源らく
わすまそしんあつくしかうそるの
仁和寺の大内山と云所よおかしをやられ出現中納言兼輔勅使ろ来りて
よまさ　是れん大内山くもへもりつめろと語りまを世て今源氏の物語ひくとこり
おりそうよまるくるのまくるとく此二段いつまころそれたるく　暁月夜初ニ書
え給ハとらく　細　色すりかうつる花わりもそのらくとり思ひをえやハる
さのるみぞ世やりきれとも心の中とハ心を出世給ぶ世ぬよもえ世世ぬ
秋きりりは　細　蓑上はとくれまりましく師　其の心ハ源の菱よとかれ
まり阿敏よ　おしもいうおして源の心　ろうまんとおこゆ
と蓑の趣備のやうよ出てし作れハ權のそれよろうおこて　源の寺自然
なるこしとまつおくへも　ことまりけてをまさういりてさ出な
細　源の心にたくさのすと
もし世おうぐあ経し云秀れ
鬼おかしいをられまる
あもし又思ひのおかるりも
下まおりるらく　暁　日
つりしくしめとし
畢　權又ハ寄き蓮かさのと
をさくの経く源よつるき
人くをくれろハこれら
よてそこくく阿おまそ
りのし　細　盃日おやおやま
くなかるよらくのとき保
の心を秘説
に由へうしるまそし
みとの新く世界の文まふ
めるはつうきひとくしこくしてくへあ一れ
出だし源人のれいふで月のかうれありかう
　細　權の　此意世
ぎるべしおちらくしあそれとてくし給
そねられてよしうまよなきけしもうれそし
　多ひさし
河べきわぎかれかわ我ヨ人ゆしちまぐくく
人めよと田ぞうかるハあきうもののあうん
　源く　細　云上を
をいそまけりさこの秘実をさらん　おる

こ給よこゝきん人そわくん
のあらく人〻心ちとおさに
てよみさくし　哢　六帖集
不のへくのゐくし　哢
あろむるし
さめやうなきことめと
無さるこみ之　細　源中最終
よ事有の心にて不用にし
いかいりんと　細　紫上の心
ま八紙と心ち給人〻ゐかま
しこまと思のきゝやうとき
まゝ　哢　紫上思ふ心寒す
も多く物ゝゑし多くまた
き給の心て
あれるしれまゝ八　師　常よ
ふとる給あれくあり
ぞうあもし云し大臣の
方よおきてこの帋し

しるしと物ゝけをつれ／＼ぐるしうひし
とおもへ人〻しとわきてかりそめれど
うちめ物やかなるさまをいとゞしくこゝろ
してゐね思ひしら思ひめぐらしけり
んと物思えぬそらなる心ちさせまゝ
きこえられねばそあれど物思ひとおぼしたる
まつはせまでさるべきのゝ人で物
へかく物語などもさせ給中納言の君と
いふはとし比忍びて思しゝかど
の御思ひの程はなか／＼さやうなる筋に
もかけ給はずあはれなる御心かなと見
たてまつるおほかたにはなつかしう打かたらひ給ひて

かく此日比ありしよりけにたれも／＼
まぎるゝかたなくみなれ／＼てえしも常に
かゝらずは恋しからじやいみじき事を
ばさる物にてたゞうちおもひめぐらす
こそたへがたき事おほかりけれとのたま
へばいとゞみななきていふかひなき御事は
たゞかきくらす心ちし侍るはさる物に
てなごりなきさまにあくがれはてさせ
給はんほど思ひ給ふるこそときこえも
やらずあはれと見わたし給ひてなごり
なくはいかゞは心あさくもとりなし給ふかな
心ながき人だにあらば見はて給ひなん物を命こそはかなけれとて

くは日比ありしよりけに
師　葵の上そての世よりまさりて
ては服の内くらしくらし
源の居まゐてゐく
みるれく　細　されまたのこ
ゐれそられてゐされ給ふを
しるしんや志しうしや
此詞も詳り
えしもつねよてられハ此ね心
うまな逢へんをゆうけり
いうこゝろ給ひて　細　源
女房達の言ゐく也
いかに久しまきゐ大臣の給ひ
しまらく源氏の
ゐるまゝよつゐく国を偲
ぶし
ゐ給なきさら袖よ　細　今よ
せハ源の御前も何ゐふりあ
ゐきこのうして
みうけなくハ　細　源の詞也
おゐしてまうまらきさを
雲ゐろへきことくし　師　名
おゐなきこと源也と云しそも
ゐそのゐうく

らがうき人 抄 葵の物のけとても陰里してとも[illegible]
とハきこえて人とも
合ごそそうみれとて 細 [illegible] 抄 [illegible]
らうし 孟 まハ死ごとや[illegible]

あてき
恋くし 河 紫日記よ工東門
院の上童よ此名あり

孟 葵の妻女とおそ

ちうきさわても 細 行[illegible]
と、ちいさくてうしこ[illegible]
の服とし 心喪よ[illegible] 細 服着の間[illegible]
くハきてうき
[illegible] 蓋 茶[illegible] 大略
知[illegible]
[illegible]
しみ[illegible]

[illegible]

ちりそれとそ火とくらなずめ給へるかま
このうちぬけしれつる[illegible]
[illegible] 葵上の[illegible]
の[illegible] 心[illegible]
[illegible] 源と葵と思
そ[illegible]
童の装束
く[illegible] 河 鈍色 汗衫
[illegible]
き[illegible] 細 源の詞
[illegible] 細 夕霧也

[illegible]

一世の名あり 葵の[illegible]

[illegible]

[illegible] 世の名[illegible]
人[illegible] 源氏の[illegible]
べく[illegible]
[illegible] 葵の[illegible] 源氏の[illegible]
[illegible] 細 [illegible]
[illegible]
て[illegible] 孟
べき[illegible]
[illegible] 源氏と
も[illegible]
院へ[illegible] 細 [illegible]
[illegible]

きらし藤わりつる袖とも
細 目殺も立めて遊戯も
御ひまありつるほど源の
御給れ花の袖にもうつ
かほり也この香に感様
なるに猶く古様念とつ
おもしみたへしらし 呼 公
呼の様思やるへし 四十九
目おとしをらくそう 歌の
藤の花なりしと源氏
花の御給ありつの事
いてわさらしぬ之き御
ねし 孟同
へしこまそ 二条の院へそ
源どまうんとく 源の時代
まえまつりぬへくなり
みつの梅一條さひしく
一 なすへしとうえし
宮かしも 孟 をかふりまう
さうゆりく 細 おそうら
をなちう八宮と云く様
おめへさみまわつされ
しゝしかうしまをやら

追らそへらそて本のえふをかふ風あつくて
ふり良ちらひをそよ。源の心 坊生人よまうかて梅人さ
りのいくしくつ御そくてむらしひまありつ
袖どもこう御ひおう 大臣の ぬ。おもうえるやうて
二条院によ 源の心 まりあへしして。またひ 葵の方は居らる源の心
ん。ともつ出てそうゆうるらてんとたまへ
こ。との 左大臣家のことさ くうら出るよ。のふみしもとおじ
おじうしとすれど。まりまりす人のがうし。
たのた坊之 地ゞし 大宮之 とうえもゝよのそうしうなまもうう給し。
防まらうやうて さあしきめて地御さう。宮の 細 源の念給とそう の御常よ世 源より大宮へ兄より
そこ嗅しまつ。院よわぼ 細 源の御心 おゝ宮のお次のいくれどの御かこ つてゆうつの給
しまうよしから。なるみかけん出てつ給ちのかしく なうそめて

中のくもし人も中くよ
御立宮の事に源の心
きうへうりてをひのを
しわしなうえされいん
しらこことえ

梅は立ち給りよ何りそそ。ほんまそて 源の心をきりうる る
みことり くゝへ給うよけうえて。そゝうう御ちの 寺
うくそそおれんかのしせんも中くよ給へ
それいぞる立ちもまつり給しねとおれは
いとなて宮はめもとえ給へそを何そうり 源よえ
て。ほねりを之。さそてあわす。坊らくぞぞや 大臣との源の宮に
がそわりのあてる。いとしまへがうゞよ現御して。 細 坊より の遊佛の宮に
細 袖も初さてよう給つぞてそてまつる 大臣の御ことし
人ゞもいと身のしお給のそのには世と現御 源氏之
しいゞくろこといと梅ぐしそ。ほとき給
き梅わそれようろうわうき地のしゝ。いつて
き梅よく宮梅めさまつり。坊らくひすうう 細 源よ姫そうらかた之 孟 同

よつひのつきのはさしを
ゆかしきさ 細 此かくの詞也
師の説のごときは花の
枝は源氏の事にて葵の上
謙はおもて紫のうへさり
しおは後まことよこ
しりふと表にも書
あかり

きよきとびとびそ
河上臣の事さのまは
しの当ひとひさ海
ともりんし

さかしひのひてじきこひの川おりのはさ
しとおもふじきことに何そこよ。微
りなむわざに侍りと。おもしてひかへる
らんやひさまへむしくれ侍り。人をえのと
め侍らねば。ひとめとはいとくるがたく。
人しれしらで何に侍らんそれは源たびける
をえまいり侍らねなりくしのつゐて
みはさやうに物ましけぎをきせまへ
いづくも侍りまじき花の末に。すり侍
られさりつくも侍りなしきぬそに
ひき川かくの結気色いとまりなし。
源のまはとしんじしらみけりくてしとくに

さしあかりてゆかし
服前にあるによ世の事
ひとハさひあられぬるそ
とかり
源みとし 前にさもうのれも
むさきそうせさせ之と左臣
の御あのしようまそうく
御しハ河海も 孟 源のおかで
よしまハこゝろさしりそぐ
のりしあふ女房のかみへて
おゝしるや 細 ニ此くの
いんかにはとゝ源をとしめ
たんあひきこのふれへき
とさらはよの結さまの哉
よろさ此 師ひまうく
ふらす 天されハ晴まれ
といふらく
あれとろましき
細 此くの詞に女房の事也
葉 女房よろよゆかせて
秋あかしと言ふかなる
し

ざ川原のさざめかさハ世のさざ浪 細 世の おもく 孟 悪
へだりすぐしうしめでらでゆ目く侍るに
どいはらひめりまじれわざにまうえ院に
をみ結葵し侍らんにや。たちても絡
てんとうさくし結さしハ河海もひまうく 左大臣の詞
侍める住吉ぬ源じふしきのうこ
え結らくえまつし結よまれ本性のさし 源氏の事
かずに女房卅人ぐらりよよりてござ 細 女房あまりあるとし
人源よのかおこやうどのおけしとりとう
うそれあびいろどもそらつられいうじ
うむ原そげよでうらきみされつ丹あ 花集
つまりさう絲いでし表とさすかひ間しそう 左大臣詞也

[illegible]

おぼさんをとまりなんればさりともと
のどくには主(いち)もせ給ふなとと
ぐさめ給ふ殿もいへにおひやりなき
女房なども念ふを頭に物見捨つるの
ともりひらく別れを
ひかりを見ずなれつるを
かんことつかなしとけれ
月の名残なりぐさげさ給ふめる
ことは御まちつれとさらとをつるに
とおひみきのさ志作りつけるにて
ぼそきゆゑにはれそも又なき

[illegible]

を給なりけれどもよいかなれ
くまおひまへつる程といとのかりけれめ
かくわりと給つらんとも今はなきを
よのそらとまつと給らんも今
てんそいそすれとよら
て入まつは思ひ出ひかりめあり
しまりつとも御なれと霊殿の
しきらぞをすまふ
てかどしらせしてすうひまそ
まうるとりてめぐらり
わかれんでそくなしき
とあるべし数行(?)

[illegible]

かなしき枕うへよりもも多
細 文集第十二 長恨哥
鴛鴦瓦冷霜花重旧
枕故衾誰与共 哭日
哭長恨哥 唐本ニハ多分
翡翠衾寒誰与共と
あり舊枕古衾とあるハ
和本ノ義なりや 是ハつゞきに
すし又云古文真宝所載
翡翠衾寒誰与共二
白氏文集第十二唐本とも
翡翠旧枕古衾誰与共去
玉昨に源氏心也 正七七
なきあとに 弄 源氏の此床を
わくられおもひこしらへ
に亡魂をとふつゝし 細 源の
んの枕方より言ひし源の
と住みし難くおもひをかけ
彼葵上の魂もさこそあ
くられらいくひとつもんと
みなえ臣さし花鳥の床
よおんの方と川ぞ以ちの
いかばかり魂の方より思を

やまとのもろこしのけうしつゞくさうぞ
ひもさ衣にくめづらしきさ風よりさまぜに
つらしこのあれまやしと定どもおもぞきか
細 源のまゝ衣をなめ給し
めぐりよそへば[illegible]てまつらばりんが
細 葵上をし
されなべし。ふかき枕にかれ[illegible]よまれ
文言のまゝ男の涙し
とりわりけせめて床に
源意
かさねぞいとゞわびしかりける床のあと
ひとりきくらむひよ又霜の花をかさね
なかり
源意
ふすまてらすやつもりぬるまでの
ひとりかしひとつ衣かさねん。ふ
左よの御し
ふべしられておしけり。ふかきこと

声をもまほてわうしたりもおとし床よりん是やそもありけれ
たまへて 細 さこ夜と床に男くしき宗の傷をれよ郡れさう時とそひかり
文集の二句を引きてよめる哥も世るまにせて述懐し 仲 古枕旧衾のかく
あるうち長恨哥よりくりうけれども男のさまみにきたる哥にとゝせし
ひとりかうむるへし 細 上の句にかろうねうる下葉の（あまいつらさんかそしき
なり 弄 孟日
ひとりよむさこうれてには
細 葵上のゆかりは正常の
前世のかれなるしし宿業
とおもく思ひけれど
ぶとよりまぎれハ又気なき
紀橋の君にし枕に面く
よ思ひ給ふし作らく
このたねのきこえれ
細 源氏もその相よかし
作とらく

おもひくし
あそびふかひなきこともたゞ世よりおなじう
あかれしらずかうひの世よなくやうそとなひな
前世の葉を
しつ、葉などうらそうくめられものども
べきこそばありけめとうらみつべく
さきの世とさへ恨みつつかんさきらさ
葵のうへ
ひとりよそへてあふさのさいかゞさきこ
おなねのきこえつまいとしそよりかしこの
源氏のかくなりし
なんおもひいうじくどひまさうむ
あわうちこし給つどもれざくようきを

さしうらなきさら
おま女房卅人ハかり
とこうらてとおり

敵の地かしのくまなきり
細地かしとうまうさん〈を
まなりけるかれえと思ひ
せまうし又ハ敵といふを
源まぞそうくはさかきん
とこ後を抱しま〈思
へくにのあまなるや
何追てまよけく

流へまつり　お茶ヲ流来
おへきるもを言り見ら
堂をその物と云之

金城の君して
細中宮の御方よりきこえ
きかうく作あつし　細源の頼く
つねなきさ世
細く中宮よりもけなう
ひのまてうしみらうり

ざよあらんむしよりて言ひ侍しと鶴久乃
ひらきしまひてはいづくなるふべかりん
とけ色をえたるのびあへるまちどなき
まま思ひへからおもれくしまさんへかどい
とうましくそさことうらなきさうそびろ
さもさ久の名しけかいつるさん〈ぐ今
まむれねつくよのかとらあられれかりと
ぞをしらうらひてよのく思がしの結ハ
もうやさし若君とうらてそへかりてかを
いなくさむべうめれと思ふもいとなかう
なるさまく
きほどのけうさこころえてこそしてよのくお
だらうするよろれおもしほどとのうちふく
あられなうこくと思ほうらう流へまつり
まうれバいとうくおもやせるなかうさくに
うそ思をかうけぬやとこうらうてしぬ
よ思かしめてゆまへそりのるどもまつ
せまそとやうくやと思れしあかりひせたさせ
まへるさ御義よりてずけおもし中宮の御さ
よまいりまへれバんでめづくしうらそ
まつ金城の君にして物ありひつきをぬくしぐ
も後福かるまつかくそといかみと御事うそ
ここちてしまりつねなき世ハ思ほうこみも
やふまへまうみしどめよちく

ゆふすそかりそ
細 此御忌意之ケうらんかり
おもいふくをたてあり
弄同
さうねびんよるあり
師 常まきん着畫へハ源の
ゆよ無あれハ黄のすよ
とりかへて此袖をぬる
しゝうて
ひりんのらへのけそ 細 鈍服
也 花 無紋袍ハ表 裏 薄色 平
縫 冬ハ常ノ袍のとき 纓
も無紋、巻纓 服なれさ
いまれるいそうらゝ 晴
晴 向云、無文の纓 其様めか
一巻 書の纓ハ無文羅(ウスモノ)之
厭世ハ無文の羅を用之
無同
られさくとゆくをさけ
さらひし 晴 源氏のけしき
さうらへるとそ給まつり
ても表上の方にとまり
しかゝのかとうやり給之

いとゞしくゆかしくぞせぬあまへさぞれしも。
よびくのいそとよかずぐさぬめそん
そふまでをとそてさうねかりうたあうれお
しきりそへていとゞむげにしげなり。
むもんのうへの御ぞに。にびいろの御したがさね
ね。えいまきたまへるやつれすがたはな
やかなるよそひよりも。なまめかしさま
さり給へり。春宮にもひさしうまいらぬ
おぼつかなさなどきこえ給て。けふなん
ぞまかで給。二条院にいでさくつへみ
けさし。御せうそこありて

ののいあさらしとうりつゝ
細 葵上方の女房達のぬす
やりしてあく
れさうそくなりし
細 花鳥云三ケ月の服なれ
ハ八月より十月まて云々
除服ノ 師 除へきし云々
公義如何 除服ハこれより
給ひ也し 花ハ此際へ
あり給ひし 衣裳と花改
きふかしへし
表 二の紙もつらひ
同 十月天衣の内裏参
師 紫の君の前ニよみ三史
しくさきあり
お納言かりておし
細 源氏のすをうひたゝ
くりとみさき而 お納言
給の後ちらと源の出給
ふくし

ぞくきけさうじたるをみるにつけても
のゐなみくしたりつる気色どもぞ
哀におぼし出られ給。御さうぞく奉りか
へて西のたいにわたり給へり。衣がへの
御しつらひくもりなくあざやかにみえて。
よきわかうどわらはべのなりすがためやすく
とゝのへて少納言がもてなし心もとなき
ところなう。心にくしと見給。姫君いと
うつくしうひきつくろひておはす。ひさし
かりつるほどに。いとこよなうこそ
おとなび給にけれとて。ちいさき御几帳ひきあ
げてみたてまつり給へばうちそばみて

えうへもまつる折は御あそびあり。帥の
げのれうにさくらしらるべしとて
のかつくしきゆう人のはしに
くもなりめでたきはいとらし
くうちまして御はつらうはじめての
とかにどうしまてひとつの物語のしら
うて出ぬしたれどはまくしたらべ
たびあるくてとまるやうからひてはべり
うん。今なるてすくなでまうべきれば
いどりうちへやかさらんとうて
こしますが。納言ほかしとこうひさ
わすとあやうしらひゆうの。やんかしる
のびたまふうくづしひきまへれば
づらしきや。さとうりのかるとかきて
ゆくさんなり。わけるよとうまて中
ねの君といふよれあらなしまつとひ
ておはしのこりぬ。あふさはいらふえ
ゆかしぬれ文まそせまつり給ふ。
又まふかもつきぬこくとのこの
つまづくよなかめうらかれどなかめ
わられも猶うくゆかしめて覚しもやう
ひめ君のなからもあやしう
のひとそしいとめでたうの心み
まうしぬ猶よろきまれしまつれば

碁うちへんづぎ
五番勝負（一番対・番続）篇を
うつけ勝負ともいへり
碁巻老人の説に番つぎ
とハ何番の字あくを
書の中に書しらべ只
打ち数を勝負とする
なり
ゆかりもあらぬ年月
御紫の様さるなき頃ハ男女
のたハむれしからうち
らくしおし文梅のさうひ
のあらしたるは頃ハかくれ
きどのもらいをしるあひ
しらのひろうくと八男
女のうちうへわるべき跡と
源のおもてく
人の名ぐらめ おお 影稲の恋ひ
しるすいそうるべきことわ
らねこいつねまも道路
ありゆくし
おも路りぬれしくわり
おもハお栲の附のやうく

ゞんうゞとなじゆりくらそしうろわさうさ
まへどみをうり路らぬけしきなりつれ
ぐやりおしんりぐこすこよて碁うちし
へんづきなどし路りて日ぐらしおもごろ
かんのらうしくぢうりあへぐやしづきぐるさ
まうれごとの中よもどりくてさとうとを
おりぞあるへし御ほしくすらうき年月に
そこでうりつうらのうらはあわりつれ
このびてくたちてふぐりしれどいふじあ
つまんへのうぢめうへてまうりゆくべき
ほ中よ色をあそぬよ何にごえハく出き路
しもがらハふしくしよ出で路のぬめしこあり

あふし頃どへしのうすし
こ人より
御慎の前を 花 文を書
侭よきて手まふ別せる
しまとゞるらくの皆
あやうくも 細 源のも路
てときまくとくんのつまて
とおやふくりとりうりは
お乃文を俤とおくひま
きうらしまく 按ずるに なやす
くハおもさうくとし 前く
より別し物とよく 御今
を影稲もせでへだてまひ
よらどそやこまつるうるさ
からけん物うあらんとれ
西源のおそりの心ありをとハ
衣りぬと紫のふくし按影稲
のさ海をそひのかよおろを
せさるうきこ海なるべし

人でいらうれじゆうくおりゆゑてえすら
らの道ハすうん田せうさし あやしとこう
まうやげくよくるとはしまうり 路をうく
御硯の前をと梅のうらよきしいれて せし
よりう人へまようてしらるすけ
まへるよ もてきしまひろう文 御梅ののさん
あかたよんりうくもまさあけてこすへで
あやなくも海りうれ 続さねさもとが
よすれし中の家どとくさもてこ ひまへるや
うなりうられいふせくもろんとハうけくを
ゆかりうくさむりしてそなじもそてうんさうり
せうれんそうしするくとめり さ物よ思ひ

なやましげにし給ふらんハ
孟 紫上も又ひよわからせ
まふくの御心おはします
よしあるなり
けふは碁もうたでさう〳〵しく
しや　およそ碁うち遊
んづきなどしつる
肖庵なり

れいの御方に
弄 金銀紅
なり紅金銀などもて四角
四面に中重ありつゝさ
しひ銀あり女房入用の
最安の御用なり
治例し

こえけんとあさましうおぼさる。ひる
つかたわたり給て。なやましげにし給ふらん
はいかなる御ここちぞ。けふはごもうた
でさう〳〵しやとてのぞき給へば。いよ〳〵
御ぞひきかづきてふし給へり。人〴〵はしりぞき
つゝさぶらへば。よりたまひて。などかくいぶせき
御もてなしぞ。思ひの外に心うくこそ
おはしけれな。人もいかにあやしと思ふらん
とて。御ふすまをひきやり給へれば。あせにおしひた
して。ひたいがみもいたうぬれ給へり。
あなうたて。これはいとゆゝしきわざぞよ
とて。よろづにこしらへきこえ給へど。まこと

にいとつらしと思ひて。露の御いらへもし
給はず。よし〳〵さらに見えたてまつらじ。いとはづ
かしやなどゑんじ給ひて。御すゞりあけて
見給へど。物もなければ。わかの御ありさまや
と。らうたく見たてまつり給ひて。日ひと日
いりゐて。なぐさめきこえ給へど。とけ
がたき御けしき。いとゞらうたげなり。
その夜さり。ゐのこもちひまいらせたり。
かゝる御思ひのほどなれば。こと〴〵しきさま
にはあらで。こなたばかりに。をかしげなる
ひわりごなどばかりを。色々にてまいれ
るを見給ひて。君みなみの方に出給て惟光

けしきいとらうたげなり
弄 御せさせ給はぬからとてし
物もなければ
若き御ありさま
なるべし

その夜さり亥子もちゐ
河海 群忌隆集曰十月亥日作餅食之使人無病
拾芥抄曰亥子餅七種粉大豆小豆大角豆胡麻栗柿糖
かゝる御思ひのほどなれば
孟 葵上の事也こなたばかりに

河 亥の子の餅ハ亥子也。
三日夜の餅ハ一夜あられ
ば数々にハあらでとなく
多くいふまじき
細 南庵のまなびにハ
のまゐらせかたし亥の日
重日なれバとし
けふあいぎやうのはじめハ日
えりして 細
花も惟光とり合せて
しをりけるにや 抄 愛敬
抄之惟光新枕の心をいへる
つゞき
三つなりけり 細 二ヶの三ッ
の一なり 嘆 三が一ハ
いはじ説ありとも口傳
別にあり 私 婚姻のこ
日よりかゝる 三夜餅を枕が
ことにさするハ先ツよう
なるまじく人の名せさせ

とめて、このもちゐかうかず〳〵にところ
せきさまにはあらで、あすのくれに
まいらせよ。けふはいま〳〵しき日なりけり
とうちゑみてのたまふ御けしきを、
心とき物にて、ふとおもひよりぬ。惟光
たしかにもうけ給はらで、げにあいぎ
やうのはじめは、日えりしてきこしめ
すべきことにこそ。さても、ねのこはいくつか
つかうまつらすべう侍らんと、まめだち
て申せば、みつがひとつかにてもあらんか
しとのたまはするに、心えはてゝたちぬ。もの
なれのさまやと君はおぼす。人にも

三夜餅ハくえしいつりられよりくふらんハ女の男のかたへ入ちかひして八二三ふたびまじりて
ながの後とりまきれば 偕老同穴の契とかうけてとて文字も帰の字と思ふ
ハ女ハ夫の家を我家と思ふへきより いふ餅と同じく男の方を見てる
らふなり 嫁娶の日よりけ衣装など用ゆる也 三ヶ一を 諸抄に三体 具の
かよひなかハわかまれるものや 秘説あるべし 別よりいゝまる
なきなく 細 惟光が申そへるをやがてもとりて

人の心もうちとけぬる也
みれ 孟 蓑に別て今ハ
葉ならし 私 新枕の
ほかもの頼ひ遺しても
ずしが今ハ一夜も隔て
のわりなきことを
まことのひのおしさ
我所よ源の心知るへ
師 私の説に曰
孟 ひとつ夜ずつして
私 惟光心ひかれて
て夜をしい御ふくらむ
あるべく

いはで、てづからといふばかり、さとにてぞつく
りゐたりける。君はこしらへわびて、いまは
じめてぬすみもてきつらん人の心ち
するも、いとをかしくて、年ごろあはれ
とおもひきこえつるは、かたはしにもあらざりけり
人の心こそうたてあるものはあれ。今はひと夜も
へだてんことのわりなかるべきことゝ
おぼさるれバ、心ほそきのみ
ひしもぬ、思ひ〳〵してしいつそま
いまはかの給ひしをなして

私 惟光が心造 作法餅と調
私 業の残墨を涼のとりあはせ
私 新枕のおほ業をそひしハるの
孟 惟光が申し
盃と称するの式各別

かうこのくるし 河 香壺匣
或ハ香粉匣 香壺の箱ハさ
じかきわう調度之諸ハ香を
入る器之 師 梅か枝の巻よ
からしくもろゝを一種こもに
じ濁ぜり三日夜餅と侍
とるしてかうふくまんあひ
花のやうにまあうきやり

まつくらよいまたさうめし
細 名勢まさ個に今は
あさかうあみにとりふて
るゆうへきれ花いまハ
よ白を切るく作る文字
ともむ説あり又一説を
別まそうもへし
うるまうじつを作りし 抄云
さへあるあざれども世弁よ
惟光か味じてふ調之 又或説
よふもすし一すんらしじしハ
弁か惟光への急参へしも
まなうのうかいじ来かしと
りかんへあさいすりかもの

さんと取りひやりかくしたるひてむすめ
の弁といふをよびてこれものひてまいらせ
せさせんとそてうごのもとに納言をいさしいれ
うりよしうふれまくしうつらよまいらせべき。
いとひのみれよろづるおなしこあさてりな
どえべおやしともとおもさかんとふるさ
きしらぬりのをしてとれへまくしよいまは
はさかりじいまをまへよちとまじて候らじ
とひふわきさ人まで執心ももえふくかりひ
すくねべりてまひりてれ桃のとのれ来桃よ
まさしつれさら代君をそれいのとまさへし
らせ候んしし人へえとらしねなつくしの

まて例のやへくもてせ
抄 源の紫まいうひ教まよ
べしとく例のとハ何事も
様々のまよ教へ主あへ
少納言ハいとうしも云と
抄 嫁娶るとの差別もなく
いつもおうてわらんと云ひ
しとかやかゝの所まで
何心の候らる又抄 熟聞
るまうれしく源のこかれ
しさうく
さてもらうくよ
細 少納言か心く紙よ侍
しあうかしたるを
師さうかくられてもうり
呼わせこしわ惟りし惟
光いうしとふかんとか納言
か手かへる任りし

此きら代まうでさせ給へつるしぞをらは
きうぎりの人へでおどひおはせらうとどをも
ありけり。れさうじもるおといいかのまよ
うしいでうり人花そくいとえきのおりく。
まうあのさ所もしきしひ。ひいて申しう
とくのへさう。少納言はいとうしろやえ
とそ取りひささしきせつれおそれねまる
じせすく取用しいつうねこしかさされんかん
絵をよそしろはりうたまるれぬぎさもうらくぎの
んとさめきのゆりうくてのみ人まいる取りひにら
と境にもおりしき御きいまつりまへる給ぐる。

河 葵

みるまゝの
の新枕とはきこそめて
秋とやへだてんゆくへ
あくは御紫とあさ夕なま
よそせていり丗文字
給ふと面白し
此しおりの
細勝月香は葵上をとくみ
まうけひしかうにしとお
とくは号ひの後へとも申
殺はさも号ひいら給ひねと
弘勝月教の因縁をつ
ふかくみらしお殿は内藤
寄の御滞胎らと我鐘
もらさずにしるべきさ大臣の
せのかゝる縁なり

物をくもくびよさあし
孟こみてはれ人ころにふと
いかく御文つくへとも
給定よくくるよさあく
あしくしくて源さまく
とかりとも給よりるそ
内へまいらんすとまか
らげまきて

くてきひさげすうらん
御紫の上そして定ま
らへよく行り
へのうちもなかすじら
源の好色をはあまく云
人まうつくひまよ内へ
人の恋ことはめて葵
上のさきそのさひを
あれは今は好色とそて
しらて人のうちは
やうよせんとのんこ世の

筆をはじめせんの源切ても画之
そのんずくなりげよあしきれば おやしの
御源の紙とはおもと之
らやとられおりしかばさらりしひまし床く
御源の思ひあらもうりく
まりへうしめしげよ叫とろうしらきこあひ
源之
なじとれはいさしとお嘆きもあれど
おねうまくらのかぶりしくそ秋と給
御かへしやんうみ返さき
ちんと細がしうそうれはいとに嘆くて
御葵上の慈傷
みやましげよのこりそてありまて世中ろ
細おりのうさまくこつけまて
いとう姫は御ゆどとぞてすん人のも
こしまらんきとのきいらんすつもぞう給
細弘徽殿へ
いまさうれいとくうげどのかい代よあ名
太右臣之
よのことつけまへるとげよしさうか
孟葵上へ
のんにしけりつゝしよらせあひぬらや

源と紫 おしじらくらんさ
されもおんなおしじらくらおしうらんさ
弄孟弘徽殿の之
せびさのおよいうふしとそひさくし
まそ葉ぼ人も好さうくさくまよあの
よ海つくいはじめしうんとすつくせ
弄 源の之悪源
まそまうんよ後少しもげむ悪もと
の勝月之
しすべての海をは光かしもかしそららあし
笑とのこ滞よ好もし
と給ひせじくさ今はこと海よわく気けんを
それも葵上の遊先よりそひさふんて
なうてなよりいそらりとじうくめ世よく
てさひさげまらうん人のうさとも御小袖
御葵の地のみそらせめて
うりそうといらあやしく好すうろ
まうら彼は悪所へいとく好かれども海て
とのまうへとまのこさくん中はつすべし

人はいましめの心あるを
とりしらのやうにそ
抄 けふのかしは又は物たひ
絵詞ならんやせちにはいる
しもしらぬ也
その人とも見わきさせぬ
抄 紫上の御姓をたゝねぬなり
物けたく人のまうしとく
としらんこゆるに
抄 竜の紫の心ほとく

うらやとられぬべくしうらむるのやうまで
ともぐし給ふべきさわかしよしもの
ききしわるすくんそはいわくんゆるしなす
ぐはとのかまは世ばしたまひこの御
君をいかにて世人もこの人をもきこえ
ここねりのげるさやかちたちくらべ
あらせられてちんと笑ひかりて
の心しんよあるものへの給ふをねぶな
べてすむねさ風よ笑ひあそられける
いかにいとおかしくされと女君へこ
うちとけとまてとしそかりよきの

やうまもえあはせまいらで
抄 西行よ同しく合せ給
なれたり
れはまうでぬ
細 みちりすゝみ花の小野
のなく紫のなれは侍らう
てきこえさせられる

さましうをかしけれとくやまうのこ給ふ
してぶやうすもえあらせ給ふつきさこ
えさせられ給ふをもうしうわらひなさこの
よ思ひしにくはれくおはしけむもあくれ
かりまへるになりさ御よめかしうといひてれ
ようを思ほされくぞしつるひきこと
しは御いとすくかれはまさしくねたる気色のつく
ろうさとくうとのゆる給ふ程にいふも
くつりぬはいろの日は御の流れまちり
給ふくぞさ義定なとふもまうり給ぞ
世よりて殿よゆきてまつり給はあつし
き舞ともいそれむかしの御事たゞむぞ

抄 源のかりしさまよりよ
く、僧されさりし
さらにそれかと見ゆるかりきよ
源氏も又大夫などの存ち
出てより葵上のかりち
見しひがらよ
抄 花あるよハ庭をひらふと
ありて花の元のえそぐれ
かりとおり
みそくか 細 也 衣架
也 明 礼記内則男女不
同椸枷 注云 椸 此謂衣
架 河海 椸架 延喜式 御衣

まて、さらしくくうかりしと出給ふまいをうへ
まいわらきましへるまゝ、源氏も出給し給
へど、さらぬさまかしうれてしのびて
けれや、そのくしきけ人をひのそわりし
よりけるまにつよくし給ふらめて何と
よいう給へれハ、人ごとをめぐりうちすら
て、たのびあれどけり君をなりのへにこま
すくかよみすると、わしひがらよおちれ
るをわされなりまくらつきうち表
家の花など海わたれハ人めまそこさ
てもうとあそれとこ給。何とうしなど

源の衣架よりかゝりて
れいのやうよしけくれとまかよ
らだぬこと、かくくさうしくしく
ありれ、家の所につそこそ分ふ
くと見の公の方とつくとうらせ
うん中くなとはてまひくむりしよ
仰よなりけりひと何とふりハいとく海よ
ふさうていろのひなくかうんず
とせおつれど見ふうらたなやつれせの
ていうしく参向くわるのども
てうそまう仍ふそそらべく
かしなりつさうわハ衣も物りが海
ねなりはくとしなるのかひなく

中くたしのしまひ
源のかりせしねえりて御間
と僧しうらし
むりしようひ給よろう
抄 源の装束を大夫ちそ奔
比老とそられしるし
細 おりく帰し定めてこゝに
を服ハおきさわるへきを采
ぞりハやつまるへとく御色
あひさらくねど大夫の心
ふさしの装束まれハ源も
ねやつしらをいよひりよ
さしく
あうはちらあるべき
細 令日元三の用意もこそ
老のひいへんとそさ人あへ
うひはやかして 大夫のお
わしかりりて御ぼまゐり
ひもすくおきてハあつまり

きゝかくし今主の御装束
なぬき二人すゑて
甚やさあわ[illegible]
え[illegible]ちしまたゆきし之 河 わ
さりしくおもひうらしうらきこ
世のき[illegible]こゝろうと雪るぞ略
咲ば斎 初菊どうり九え[illegible]
說[illegible]どののかくえ只まし
の姫君そえしまう世人の心
中そもかうべき
あまるとし 細 よの百歳
去年にゆうりたりし
あさうしき 細 人まの命之
表傷雨 八あるしてかく
いとなく蓬生の[illegible]に
おり中之おも 年の源のうら志
うしよるなく源のとくうまも
つゝわうんのとゞつけて
下に蓬の心あり
とうつうまろべきにてりくそ
花 花子紀 抄 表抄云源氏
も大宮も今は[illegible]しと
[illegible]

てきこゆるは。細 源の御末々[illegible]かくなりて[illegible]ぐしおはしつればいかゞうた
われましくなむぐうしけりつり中は哀やさ
めうともまづけらんざうれ有わん
いりはらつれど。細 よりひきうへのでしらてことく
どもは[illegible]くて。えさをつくさせ給しれ
あ[illegible]るとしなふあつかひいめかうがら[illegible]
てし源ぞふかうらすまうえてぞ[illegible]え
めねとなむしまつりけるかり
あ[illegible]てこしき年ともいそぎふかうめのいかり
あう人のすぢゆらりら。どうかなるべきこと
まぞあつめけや

[illegible]